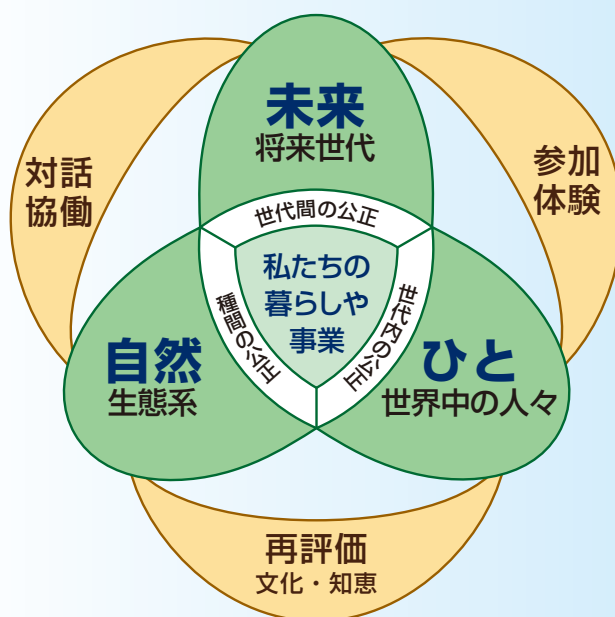




次世代CSRにおける サステナビリティ教育指針

持続可能な社会の実現をめざす企業と企業人のための
ESD（持続可能な開発のための教育）ガイドライン
(第2.0版)

3つの公正×3つのアプローチ=危機をチャンスに！





次世代 CSR におけるサステナビリティ教育指針

持続可能な社会の実現をめざす企業と企業人のための
ESD（持続可能な開発のための教育）ガイドライン（第2.0版）

目 次

はじめに

第 1 部：指針

指針策定にあたって……………P.02

理 念……………P.03

指 針……………P.04

第 2 部：プログラム提案

プログラム開発にあたって……………P.08

プログラム紹介

- 0. プログラム概要……………P.09
 - 1. 組織内型／導入編……………P.10
 - 2. 組織内型／創発編……………P.14
 - 3. マルチステークホルダー型……………P.18

資料および教材

- 0. 資料と教材について……………P.22
 - 1. 指針（簡易版）……………P.24
 - 2. セヴァン・スズキ「伝説のスピーチ」……………P.28
 - 3. ファクトカード……………P.29
 - 4. アンケート(例)……………P.64

第 3 部：指針（簡易版）各国語バージョン

- 2. 中国語版……………P.70
- 3. 韓国語版……………P.74

ESD 研究センター紹介

おわりに

はじめに

本年は「持続可能な開発（SD）」に向けた行動を国際的に提起した地球サミットから20年にあたります。この間、地球温暖化などの地球環境問題の激化や経済格差の拡大など、世界はますます持続不可能な状況になってきました。SDや類語のサステナビリティは用語として徐々に広まってきましたが、残念ながらいまだ社会の主流とはなっていません。

SDの概念を企業の人材育成を含むあらゆる教育・学習の中に組み込むこと、また、SDやサステナビリティを社会に主流化させるための活動が、ESD（持続可能な開発のための教育）です。CSRへの取り組みや国連が企業と提携するグローバルコンパクトなどを通じて、企業によるSDの取り組みは少しずつ広がってきています。特にISO26000では、SDへの認識を広げていくためにESDについても言及されています。2002年の国連持続可能な開発サミットで日本が提起した国連「ESDの10年」を契機に、ESDの国際的な取り組みが推進されてきましたが、本年6月に予定されている地球サミット20周年を記念した「リオ+20」の開催、さらに、2014年に日本で開催される国連「ESDの10年」最終会合を契機に、SDとESDへの社会的関心は今後ますます高まっていくものと思われます。

このような中、立教大学ESD研究センターCSRチームは、2007年のセンター設立より、企業活動にESDを導入する指針を提案するため、国内外のCSR現状調査を行い、その成果を広く発表して参りました。これらの成果は、阿部治・川嶋直（編著）『次世代CRSとESD』（ぎょうせい、2011年）として刊行しておりますのでご参照ください。

そして、多くの関係者の皆様のご協力を賜り、本指針の第1.0版を2010年5月に、第1.5版を2011年2月に発表し、その際に頂いたフィードバックを反映させ、この度、第2.0版を完成するに至りました。本版では、指針に基づいた人材育成プログラムの提案も行っています。

持続可能な社会づくりを指向する企業活動を展開する際にご活用頂ければ幸いです。

2012年2月
立教大学ESD研究センター・センター長
阿部治

次世代 CSR におけるサステナビリティ教育指針

第 1 部 指 針

指針策定にあたって

理 念

指 針

指針策定にあたって

立教大学ESD研究センターは、世界で展開する「持続可能な開発のための教育(ESD)」の動きに応じ、人文・社会科学の分野におけるESDに関する統合的な研究を推進することを目的に、2007年に設立されました。アジア、太平洋、CSR、統括の4つのチームからなり、本学内外の研究者と実務家によって構成されています。

ESD (Education for Sustainable Development) = 「持続可能な開発のための教育」とは、一人ひとりが、世界の人々や将来世代、また環境との関係性の中で生きていることを認識し、よりよい社会づくりに参画するための力を育む教育です。2002年のヨハネスブルグ・サミットで日本が提案し、国連の採択を経て、2005年から2014年までの期間、「国連ESDの10年」として世界中で展開しています。

CSRチームは、国内外のCSR(企業の社会的責任)とESDをめぐる動向について調査研究を進める中で、**持続可能な社会づくりにおける企業の責任の大きさ**を改めて認識しました。そしてCSRを推進していく上で、企業ならびに企業人がESDのエッセンスを理解し活用することが、とても重要であると考えました。そこで「次世代CSRにおけるサステナビリティ教育指針—持続可能な社会の実現をめざす企業と企業人のためのESDガイドライン」を策定した次第です。

この指針は、企業関係者の中でも責任と影響力の大きい**経営者と株主の理解とコミットメント**を求めます。また全ての従業員が自ら考え行動するきっかけになることを願っています。さらに、取引先、地域コミュニティ、NPO、教育・研究機関、官庁・自治体、メディア等、様々な利害関係者(マルチステークホルダー)と、共に学び実践することを期待しています。

次世代のCSRとして、ESDを活用した人材育成が、企業と社会の持続可能性に貢献することを、私たちは確信しています。容易な道ではありませんが、多くの方々と協力しあい、この指針の改善を重ね、さらに、この指針に基づく研修のプログラムづくりと実践へと、地道に取り組んでいきたいと思っています。また、この指針をもとにした、各社各人の研修プログラムづくりへの展開を期待します。

次世代 CSR におけるサステナビリティ教育指針

理 念

感性と直観を重視した 次世代CSRの確立をめざして

グローバル化が進み、また、あらゆるものごとが複雑に関係しあった世界に生きる私たちは、私たちの暮らしや企業活動が、自然環境や世界の人々、そして未来にも大きな影響を与えていることを深く自覚します。

持続可能な社会の実現にむけて、人や組織を活かしながら、社会はもとより自然界も健全に保たれるようなビジネスを追求します。

私たちの暮らしや企業活動が、世界の課題とつながっていることに気づき、そこから新たな発想を生むために、論理的思考だけでなく、社会的課題への「感性」と「直観」を大切にします。

サステナビリティに真正面から取り組む次世代CSRとして、ESD(持続可能な開発のための教育)を活用した企業人教育に取り組みます。

指 針

持続可能な社会の実現をめざす私たちは、以下の7つの指針に基づき、それぞれの立場と現場から、持続可能な社会づくりのために、サステナビリティに敏感な人材を育成することに取り組めます。

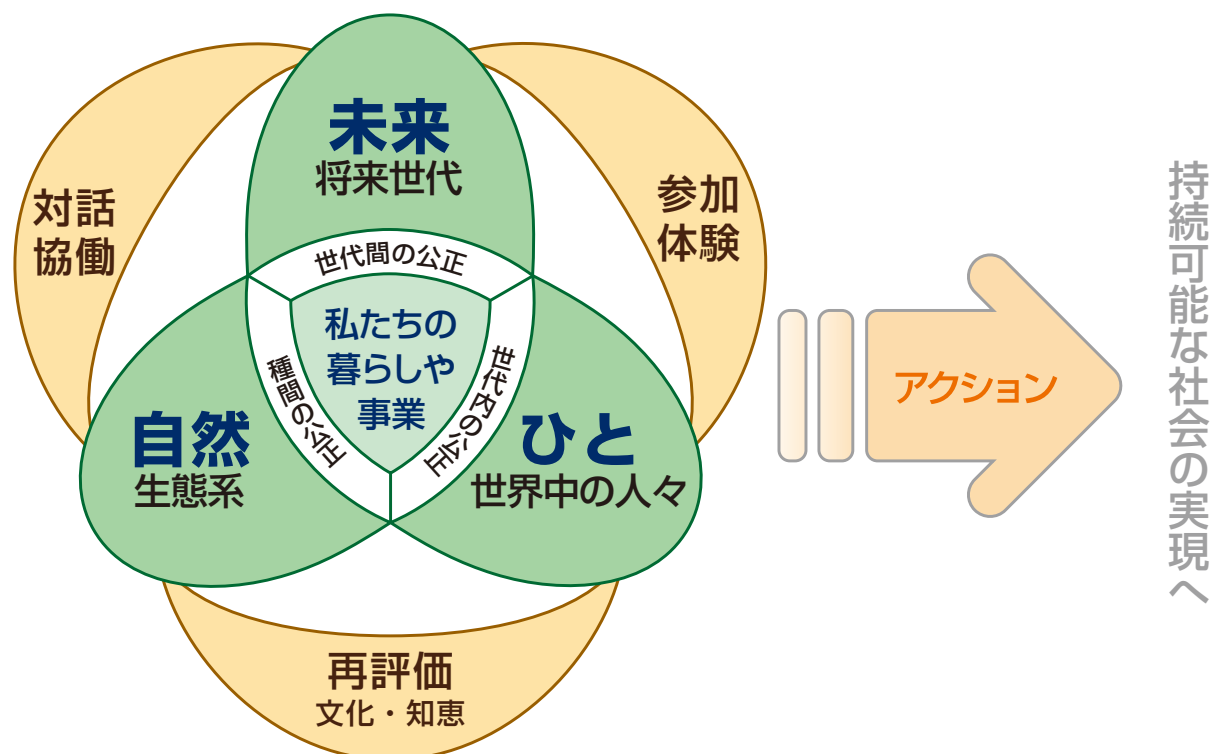
そのために、次の「3つの公正」の視点を持ち、「3つのアプローチ」をはかることで、「危機をチャンス」にしていきます。

アクション

●**危機を「チャンス」に、積極的に取り組む**

持続可能な社会づくりの課題に対し、敏感な対応ができないと、ビジネスにとって「リスク」になりますが、逆に積極的な取り組みができると「チャンス」(機会)として活かすことができます。私たちの暮らしや企業活動が世界の課題と関係していることをしっかりと見透し、人も社会も世界も持続できるビジネスを創出することができる企業人が生まれる環境づくりに取り組めます。

3つの公正×3つのアプローチ = 危機をチャンスに!



3つの公正

●世代間の公正〈未来・将来世代〉

将来の世代が、私たちと同等の環境を享受する権利があることを深く認識し、私たちの事業や暮らしが未来に与える影響を常に考え、行動に活かします。

●世代内の公正〈ひと・世界中の人々〉

私たちの事業や暮らしが、途上国をはじめ国内外の社会・経済的弱者とも関係していることを認識し、できるだけ負担を強くないよう考え、実践に努めます。

●種間の公正〈自然・生態系〉

人間と自然、ヒトとヒト以外の生物との関係を根本的に問い直し、人や社会の基盤である生態系からの発想を心がけます。

3つのアプローチ

●対話と協働

簡単な答えのない持続可能な社会の実現にむけて、多様な価値観を尊重し、これまでの常識にとらわれない新たな価値を創造するために、幅広い分野の関係者との「対話」を積み重ね、違いを活かして「協働」していきます。

●参加体験型の学び

自然や社会と私たちをつなげる「感性」や「直観」を育み、自分ごととして当事者意識や主体性を培うために、知識伝達型の教育だけでなく、ESDの実践の中で重視されてきた「参加体験型の学び」の手法を活用します。

●文化と知恵の再評価

各国各地域で忘れられかけている文化や伝統的な自然観などを見直し、そこから学べる知恵を再評価し、未来に継承発展させます。



次世代 CSR におけるサステナビリティ教育指針

第2部 プログラム提案

プログラム開発にあたって

プログラム紹介

- 0. プログラム概要
- 1. 組織内型／導入編
- 2. 組織内型／創発編
- 3. マルチステークホルダー型

資料および教材

- 0. 資料と教材について
 - 1. 指針(簡易版)
 - 2. セヴァン・スズキ「伝説のスピーチ」
 - 3. ファクトカード
 - 4. アンケート(例)

プログラム開発にあたって

ガイドラインとプログラム提案は1セットです。

第1部の指針（ガイドライン）をベースにしたプログラム提案をします。基本的には指針をベースにして、各組織や研修参加者の状況に応じてカスタマイズしたプログラムをその都度組み立てるべきですが、「例えばこの指針をベースにしたプログラムとはどのようなものが考えられるのか」について、例として具体的なプログラムを次ページから提案します。このプログラム提案を参考にしながら、それぞれの組織や研修参加者の状況に合わせたプログラム・デザインをしてください。

このプログラム提案では、2010年～2011年にかけて試行された数回のプログラム実施の経験を元に、3つのプログラム提案をします。1つは組織内型／導入編、2つ目は組織内型／創発編、そして3つ目はマルチステークホルダー型です。3つ目の提案は、複数の組織からの参加を想定しています。

付録の教材をぜひ使っていただきたい。

ESDの理解の前に、そもそもサステナビリティ（持続可能性）の理解というステップを踏まなければならないことに気付きました。その理解の支援教材として、「ファクトカード」（P.29～P.62）を作成しました。ESDが俯瞰する社会的課題の広さを、このカードを机の上に拡げることによって感じ取っていただき、それぞれのファクトカードを手にして読むことによって「こんなことが起きているんだ」「こんなところに相互関連があるんだ」と気付いていただくことをねらいとしています。このファクトカードは世界が直面している多くの社会的課題の全体から言えば、量質ともに決して十分ではありませんが、あくまでも研修の導入のためのものと割り切りました。どうぞ、ご活用ください。

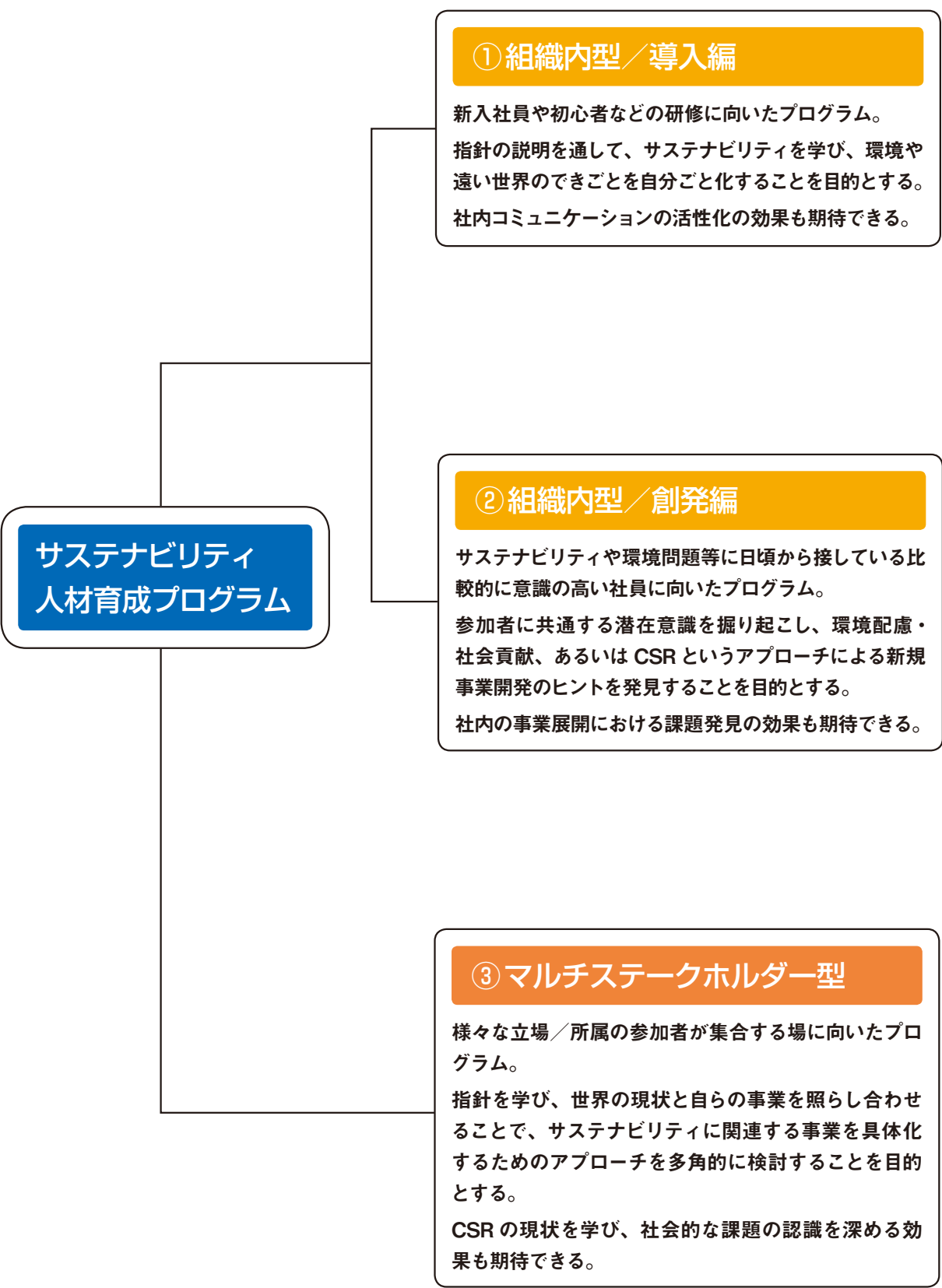
誰にも効くような万能薬はありません。プログラムはそれぞれの対象に合わせてカスタマイズをしてください。

先にも書きましたが、このガイドラインをベースにして、プログラムは各組織や研修参加者に合ったカスタマイズをしてください。

プログラムを企画実施するファシリテーターの紹介を承ります。
詳細はNPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（ESD-J）まで、お問い合わせください。

NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（ESD-J）
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山B2F
E-mail:admin@esd-j.org TEL:03-3797-7227 FAX:03-6277-7554

プログラム紹介 0. プログラム概要

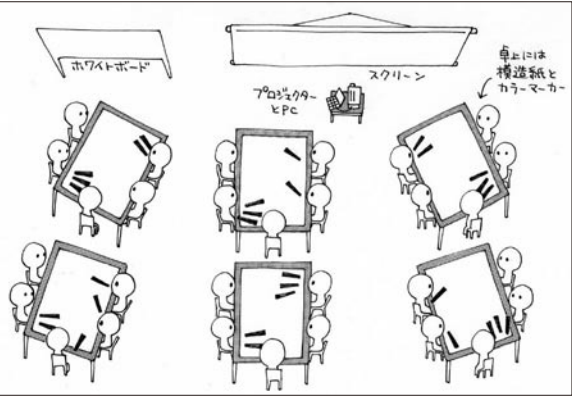


プログラム紹介 1. 組織内型／導入編

新入社員や初心者などの研修に向けたプログラム。
指針の説明を通して、サステナビリティを学び、環境や遠い世界のできごとを自分ごと化することを目的とする。
社内コミュニケーションの活性化の効果も期待できる。

ねらい	指針を通して、サステナビリティの実現に重要となる視点とアプローチを学ぶ。 “他人ごと”と思われることが“自分ごと”とつながっていることの自覚を参加者に促すことで、社会的な課題と事業の関連性について認識を深化させる。
所用時間	2 時間～ 3 時間
適切な人数	20 人～ 50 人
理想的な会場	可動の椅子と机がある大きめの会議室など（グループを複数つくるため）。 プロジェクター、PC、スクリーン、ホワイトボードの設備があるとなお良い。
対象	新入社員やサステナビリティに関心を持ってもらいたい社員など。
副次的な効果	対話を通して、部署や世代などを越えたコミュニケーション活性化の効果も期待できる。
必要物品	カラーマーカー、模造紙、指針（簡易版）、セヴァン・スズキ「伝説のスピーチ」、白紙

理想的な会場づくり



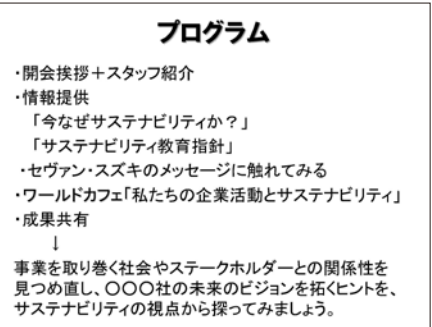
0:00 (5分)開会挨拶 (資料①、資料②)
セミナー開催の目的とプログラム概要の説明、ファシリテーターをはじめとするスタッフの紹介等を行う。

0:10 (5分)チェックイン (資料③)
導入トークとして、情報提供を行う。
リオサミット (1992年) やブルントラント委員会 (1984年) などの社会的経緯、あるいはISOやCSR、気候変動問題や生物多様性問題などを含む環境課題、環境→持続可能性、持続可能な開発の概念などに関わる現在の潮流、話題のニュースとサステナビリティの関連性などについて情報提供を行い、サステナビリティが世界の課題として切実になってきていることを説明し、参加者の理解と参加意欲を上げる。

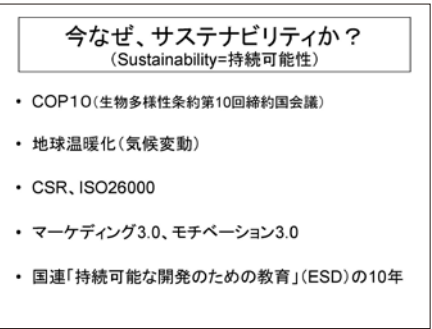
スクリーン投影用資料案



資料①



資料②



資料③

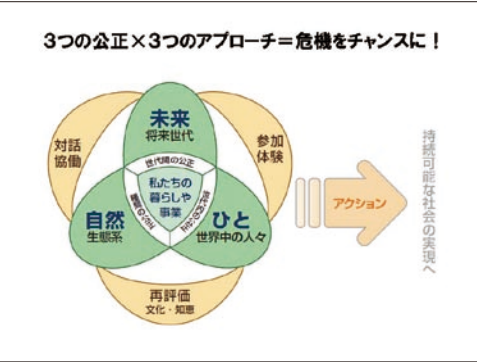
0:15 (10分)「次世代CSRにおけるサステナビリティ教育指針」紹介 (資料④、資料⑤)
指針 (簡易版) (※P.24～P.27) を配付し、ガイドラインの紹介を行う。サステナビリティを実現するために必須である“3つの公正”と、その理念を現実のかたちにつなげるための“3つのアプローチ”について説明する。
また、時間があれば、チェックインのテーマである「今、なぜ、“サステナビリティ”か？」というテーマについて、社会を持続不可能とする世界的課題 (たとえば環境問題、貧困問題、ジェンダー問題、平和問題など) の現状、その解決に向けた社会的な動向についても紹介し、その危機に対峙し、積極的な対応を行うことが、企業の社会的信頼や新規事業の開発につながってゆく可能性があるということを示し (具体的な事例があるとなお良い)、サステナビリティの重要性を参加者と共有する時間を取りたい。

0:25 (10分)体験プログラム (資料⑥)
セヴァン・スズキ「伝説のスピーチ」
リオサミット (1992年、環境と開発に関する国連会議) において当時12歳だったセヴァン・スズキが行った「伝説のスピーチ」を素材に、読む／聞くのプロセスを経て、“他人ごと”の世界を“自分ごと”に引き寄せ、相関を確認するためのワーク。
参加者に1人1枚ずつ、メッセージ全文が掲載された資料 (※P.28) を配付し、2人組になり、1文ずつを読み合う。可能であれば、予め動画 (約7分) の再生の準備をしておきたい。
本ワークは、参加者の感覚をほぐし、緊張を解き、次のプログラム (ワールドカフェ) を活発化させるのにも有効となる。

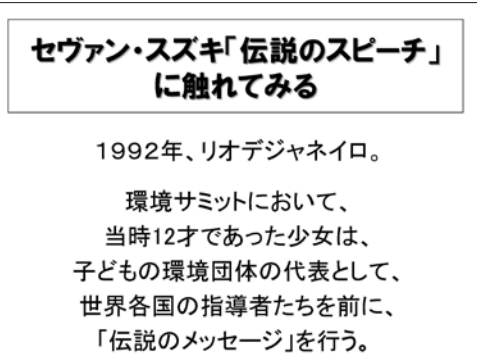
《参考：ナマケモノ倶楽部 VHS販売URL》
<http://namakemono.shop-pro.jp/?pid=4922079>



資料④



資料⑤



資料⑥

0:35 (60分)ワールドカフェ(資料⑦)

「私たちの企業活動とサステナビリティ」

ワールドカフェは、多人数の場で、4人～5人のグループに分かれ、気楽な雰囲気の中で1つのテーマについて話し合う全員参加型の対話の手法。

各テーブルには、模造紙1枚と人数分以上のカラーマーカーを準備し、各者が対話の内容を自由に記録してゆく。その際、模造紙の真ん中に、話し合うテーマを記しておく、話題がぶれにくい。

また、なるべく知り合い同士がかたまらないよう、グループ分けを工夫することが望ましい。

●ラウンド1:「種間の公正」に着目する(資料⑧)

例題「私たちの事業や仕事は、環境(自然)と、どのようにつながっているのだろうか?」

●ラウンド2:「世代内の公正」に着目する(資料⑨)

例題「私たちの事業や仕事は、世界中の人々と、どうつながっているのだろうか?」

●ラウンド3:「世代間の公正」に着目する(資料⑩)

例題「環境(自然)や世界中の人々に、なるべく負担をかけず、健やかな未来を築いてゆくために、私たちにできることは何だろうか?」

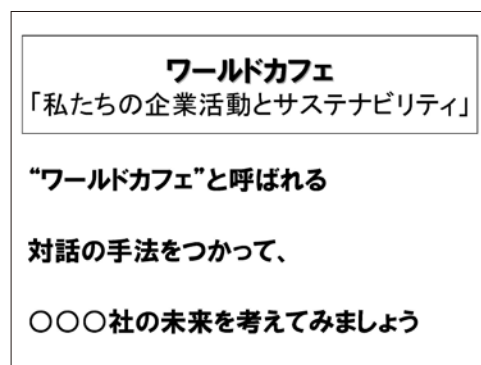
1ラウンドを20分とし、その間に3セットの対話を行う。1セットごとに、グループを解散して、自由にメンバーを入れ替え、新しいメンバーで対話を再始動する。旧グループから新グループに移行する時、1人はホストとして旧グループに残り、それまでの対話内容をグループの新メンバーに伝え、話を積み重ねてゆく。

時間のあるときは、ラウンドの時間を長めに取ったり、ラウンド後の気づきを全体にシェアする時間をとるなどし、ワークの意義を深めたい。

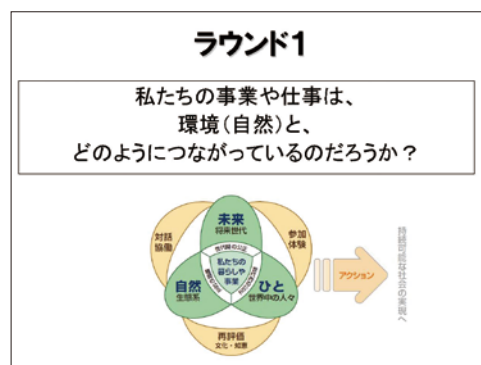
また、企業の課題や関心事などに合わせて、テーマを自由に設定したり、同一のテーマでラウンドを繰り返すことも可能。

《参考:ワールドカフェについて》

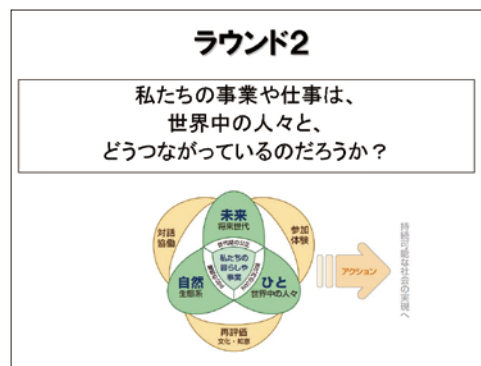
<http://www.humanvalue.co.jp/service/wcafe/>



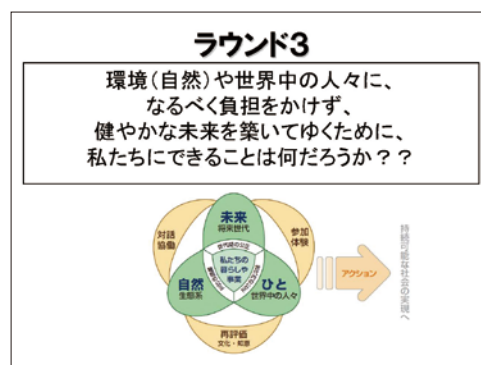
資料⑦



資料⑧



資料⑨

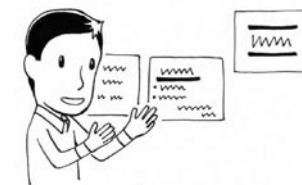


資料⑩

1:35 (10分)ハーベスト

企業活動とサステナビリティの関連性について、どのような学びや発見があったか、ワールドカフェの最後のラウンドで対話を行ったグループ別に発表する。あるいはグループに関わらず話したい個人が手を挙げて発表する。

ワールドカフェの対話を経て、企業におけるサステナビリティの位置づけ、あるいは方向性について確認するためのワークとなる。



1:45 (10分) チェックアウト(資料⑪、資料⑫)

白紙に、セミナーに参加しての学び(感想・気づき・発見・疑問など)を書き、1人ずつ短く発表する。また、「企業としての学び」と「自分としての学び」など複数のテーマで発表しても良い。その際、可能であれば、サステナビリティの視点から、企業活動のビジョン案を挙げる時間とりたい。

なお、参加者が多い場合は、グループ内で発表をし合うなどの工夫が必要。

1:55 (5分)閉会の言葉

セミナーを通して見出された成果や課題を、客観的な視点から述べ、全体を総括する。



2:00 終了(資料⑬)

できるだけ、参加者にアンケートへの回答(※P.64)を依頼し、フィードバックを得て今後のセミナーに役立てる。

◎セミナー実施者からのコメント

- 限られた時間のなかで、企業におけるサステナビリティの位置付けを見出すのに効果的なプログラムである。
- 企業の就業時間内でセミナーを行う場合、2時間が現実的な長さであるが、ワールドカフェの議論の深化をはかり、気づきにつなげやすくするためには、可能な限り長めに時間を取った方が良い。
- 年齢層や性別、所属部署など、多層な参加者が集まることが望ましい。

◎セミナー参加者の方々からのご感想

- 上下関係／部署に関係なく、みんながいろいろなことを考えていることが解った。それらを知りあい、その学びを今後の仕事に生かしたいと思った。
- それぞれの意見には統一性がないが、それらを取り入れることで自分の意識を広げることができるかもしれないと思った。
- 物事を多面的に見ることの大切さに気付いた。
- 各々の意見を出す場所が日常ではあまりないと感じた。
- 未来を考えることの難しさを実感した。
- 他部署ともコミュニケーションを保てるような会社にしたいと思った。
- 次世代の社員に対して、今、何かをしないとならないと意識した。
- “持続可能な社会”の実現を意識して行動することの大事さを再認識した。
- 参加者が活発な意見を出してくれた。最初は雰囲気が固かったが、最後は活発になった。

今日の気づきや成果を共有しましょう

「企業活動」と「サステナビリティ」の
関連性について、
どのような学びや発見がありましたか?

資料⑪

今日の気づきや成果を共有しましょう

セミナーを通して、
どのような「学び」がありましたか?

資料⑫

今日はありがとうございました。 アンケート記入にご協力ください。

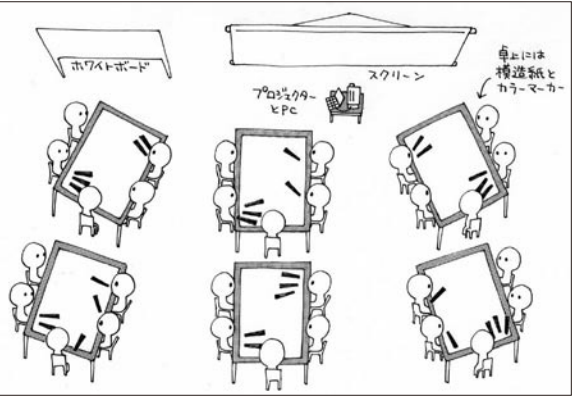
資料⑬

プログラム紹介 2.組織内型／創発編

サステナビリティや環境問題等に日頃から接している比較的に意識の高い社員に向けたプログラム。
参加者に共通する潜在意識を掘り起こし、環境配慮・社会貢献、あるいはCSRというアプローチによる新規事業開発のヒントを発見することを目的とする。
社内の事業展開における課題発見の効果も期待できる。

ねらい	参加者のなかにあるサステナビリティの意識を引き出し、その力で、環境配慮・社会貢献、あるいはCSRのアプローチによる新規事業のヒントを得る。
所用時間	2時間30分～3時間30分
適切な人数	10人～30人
理想的な会場	可動の椅子と机がある大きめの会議室など（グループを複数つくるため）。プロジェクター、PC、スクリーン、ホワイトボードの設備があるとなお良い。
対象	サステナビリティに対する意識・理解が比較的に高い社員など。
副次的な効果	現状の事業展開における課題を発見する効果も期待できる。
必要物品	カラーマーカー、模造紙、指針（簡易版）、白紙

理想的な会場づくり

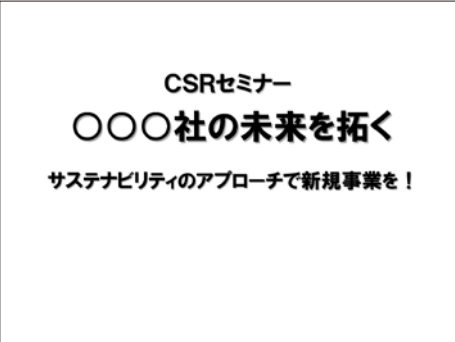


0:00 (5分)開会挨拶（資料①、資料②）
セミナー開催の目的とプログラム概要の説明、ファシリテーターをはじめとするスタッフの紹介等を行う。

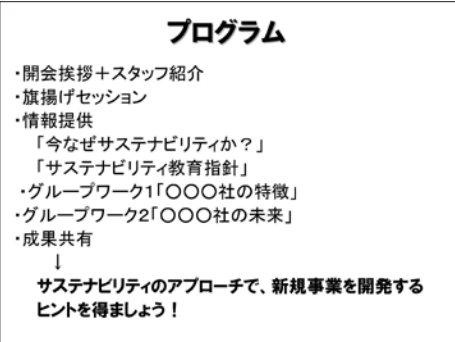
0:05 (15分)チェックイン
●旗揚げセッション(10分)(資料③)
参加者のサステナビリティおよびESDに対する理解度、また仕事の関連性等について把握する。
旗揚げセッションは、1～5の番号が書かれた色の異なるカードを1セットとし、参加者に1人1セットずつ渡して、質問に対する回答を総合的に可視し、時間的に判断できる方法。参加者同士の相互理解にも有効であり、セミナーの雰囲気づくりにもつながってくるので、参加者の所属や立場などによって質問の項目を随時工夫を施し、ゆとりを持った進行を行いたい。

《参考：旗揚げセッション用ExcelシートダウンロードURL》
http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/program/CSR_discussion.xls

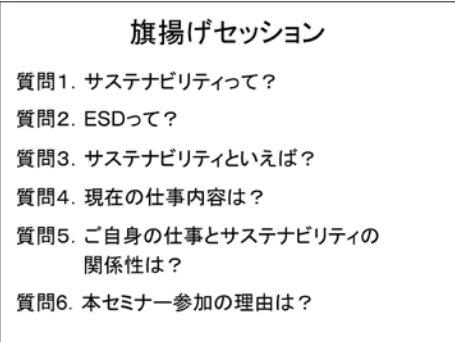
スクリーン投影用資料案



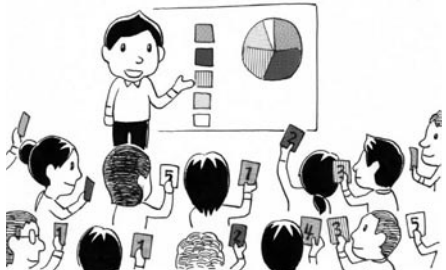
資料①



資料②



資料③



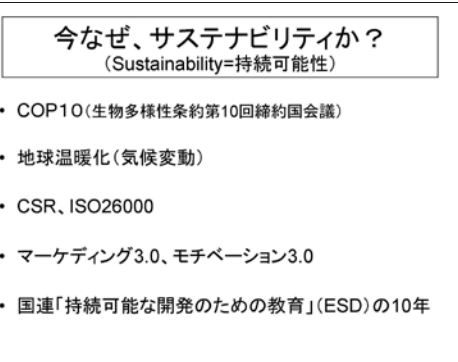
●情報提供(5分)(資料④)
リオサミット(1992年)やブルントラント委員会(1984年)などの社会的経緯、あるいはISOやCSR、気候変動問題や生物多様性問題などを含む環境課題、環境→持続可能性、持続可能な開発の概念などに関わる現在の潮流、話題のニュースとサステナビリティの関連性などについて情報提供を行い、参加者のモチベーションをあげる。

0:20 (60分) グループワーク1「○○○社の特徴は？」(資料⑤)
●ガイドラインと○○○社の事業事例(10分)(資料⑥、資料⑦)
指針(簡易版)(※P.24～P.27)を配付し、“3つの公正”について簡単に説明する。その上で、自社のCSR活動等のサステナビリティに関する事業を全体で振り返り、事例を発表し合う。

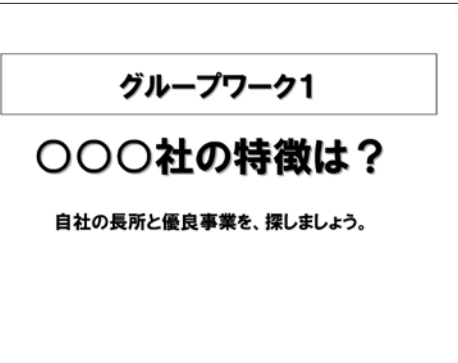
●アイデア出しのテーマを設定する(10分)
一見CSRとは関わりのないように見える事業や商品・サービスを動詞的に言い換え、これを、コンサルティングのアイデアとなるテーマとして設定する(例えば、空調機製造メーカー＝空気の流れを作る会社、計算機製造メーカー＝数字で意味を伝える会社、警報機製造メーカー＝リスクを「見える化」する会社、重機製造メーカー＝水資源の利活用を効率化する会社、など ※P.20にも用例)。
時間のない場合は、ファシリテーターが予め用意したキャッチコピーを提示してもよいが、時間がある場合は、グループワークで生み出したい。

●グループディスカッション(20分)
動詞的に言い換えられたテーマを発想の切り口に、自由にCSRアクションのアイデア出しを行う。
また、可能であれば、自社の長所と優良事業がどのような社会的意義を持つのか、今後の展望や課題などについて考える時間を取りたい。

●発表(20分)
時間の余裕がある場合は、1人1例ずつ発表する。時間がない場合は、グループで1例ずつ発表するなどして時間の調整をする。
発表時に使用した紙は、回答を内容別に分けて会場の壁に貼るなどし、参加者が常に自分のアイデアを確認できるよう工夫したい。
なお、ワークの結びに、社内のリソースが新規事業開発につながる可能を秘めていることを示唆すると、セミナー進行の軸を作りやすい。



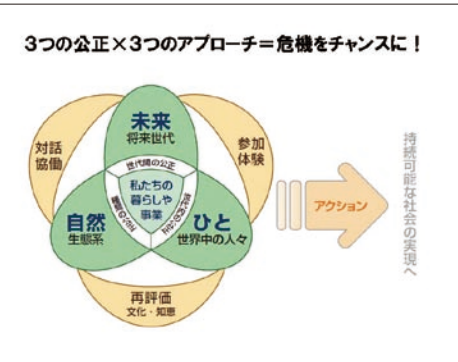
資料④



資料⑤



資料⑥



資料⑦

1:20 (60分)グループワーク2「〇〇〇社の未来」
(資料⑧)

●ディスカッション(20分)

まず、“3つの公正”について、確認する時間を短く取る。そして、参加者の関心別に、「自然」「ひと」「未来」の3グループに分かれ、それぞれのアプローチから、どのような事業を開発することができるのかをディスカッションする。

ディスカッションの際には、グループワーク1のアイデア出しで得られた多様なアイデアを積極的に活用する。

模造紙をグループ別に配付し、自由に記録するスペースを設けておくと、発表時に役に立つ。可能であれば、ファシリテーターも各グループのディスカッションに参加し、参加者の声を集約しながらディスカッションの活性をサポートする。

●まとめ(20分)

白紙を複数枚グループ別に配り、発表内容をまとめる。起承転結を意識した構成にすると発表しやすい。

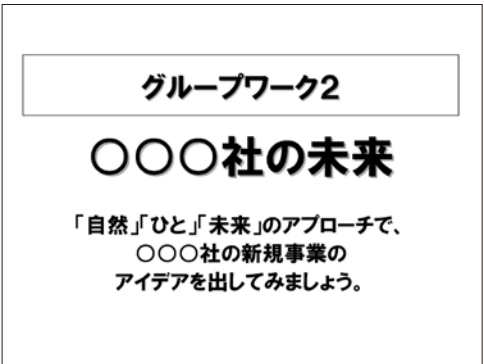
●発表(20分)

各グループの代表が、新規事業案を発表する。発表に使用した紙は、参加者が見やすいよう、会場の壁やホワイトボードに貼るなど工夫したい。

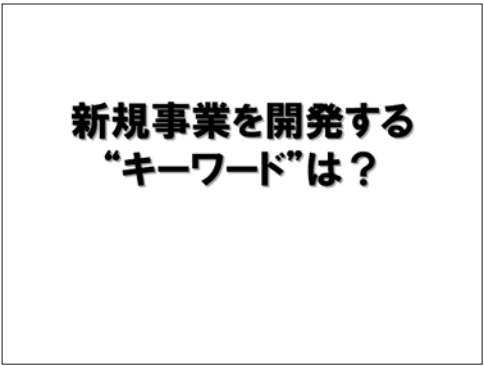
発表の順番は「自然」「ひと」「未来」とし、ファシリテーターは各グループの発表内容をつなげてゆく。

また、各グループがディスカッションしてきた内容を結びつけるような共通キーワード(資料⑨)を見出し、そのキーワードこそが新規事業を開発する際のヒントとなることを示す。その際、グループワーク1で生み出したキャッチコピーと関連させることができるとより良い。

なお、時間的な余裕があれば、参加者自身でキーワードを発見できるようにファシリテーションしたい。



資料⑧



資料⑨

2:20 (10分)閉会の言葉

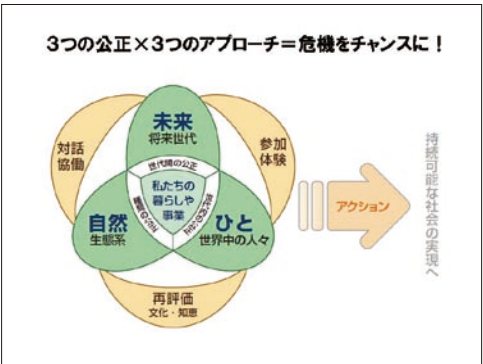
ガイドラインの“3つの公正”を簡単に振り返り、その上で、本セミナーが“3つのアプローチ”を意識した手法をとっていたことを明かす。(資料⑩)

また、グループワークで発見されたキーワードは、参加者各自に潜在するサステナビリティの意識を表出させたものを言語化したものであることを説明する。

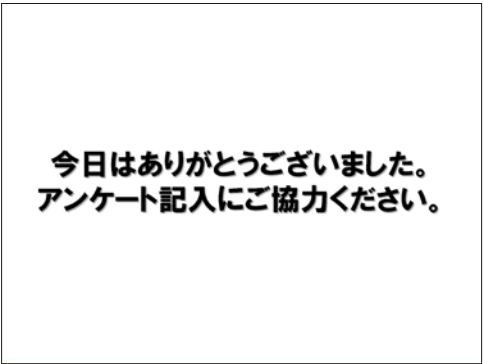
最後に、セミナーを通して見出された成果や課題を客観的な視点から述べ、全体を総括する。

2:30 終了(資料⑪)

できるだけ、参加者にアンケート(※P.64)への回答を依頼し、フィードバックを得て今後のセミナーに役立てる。



資料⑩



資料⑪

◎セミナー実施者から

- サステナビリティに対する意識と理解が比較的に高い参加者によるセミナーであるため、ディスカッションやワークの進行は基本的に参加者に任せ、サポート程度のファシリテーションを施すことが適当である。
- ガイドラインの説明は要点に絞り、セミナーを通して体感してもらい、参加者各自の内部で腑に落とせるように工夫したい。
- ワークのまとめとなる共通キーワードの発見は重要になるので、セミナー開始時より、その点を意識して進行状況を追ってゆくと良い。

◎セミナー参加者の方々からのご感想

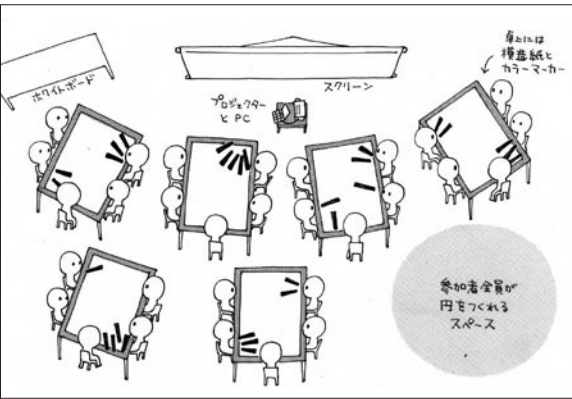
- 自社の事業を見つめ直す良い機会になった。
- 自社の特徴に着目し、サステナビリティについて考えることが、ビジネスチャンスを生み、ひいては持続可能な社会づくりにつながると感じた。
- 「自然」「ひと」「未来」の3本柱でディスカッションすることで、企業として社会に貢献できるさまざまな可能性があることを認識し、それらを具体的に実行してゆきたいと思った。
- 普段何となく考えていたことが、一言のキーワードに集約されたことで、新規事業を創出する足がかりを得た。

プログラム紹介 3. マルチステークホルダー型

様々な立場／所属の参加者が集合する場に向けたプログラム。
指針を学び、世界の現状と自らの事業を照らし合わせることで、サステナビリティに関連する事業を具体化するためのアプローチを多角的に検討することを目的とする。
CSR の現状を学び、社会的な課題の認識を深める効果も期待できる。

ねらい	多様な立場の参加者が混在する空間で、多角的な視野によるディスカッションを行うことにより、自らが所属する企業の事業を客観的に捉え直し、サステナビリティの概念を事業として具体化させるアイデアを得る。
所用時間	3 時間～4 時間
適切な人数	20 人～ 60 人
理想的な会場	可動の椅子と机がある大きめの会議室など（グループを複数つくるため）。プロジェクター、PC、スクリーン、ホワイトボードの設備があるとなお良い。
対象	様々な立場および所属の参加者。
副次的な効果	各企業の CSR の現状、社会的な課題、コンサルティングの手法等を、体験的に学ぶ効果も期待できる。
必要物品	カラーマーカー、模造紙、指針（簡易版）、ファクトカード、白紙

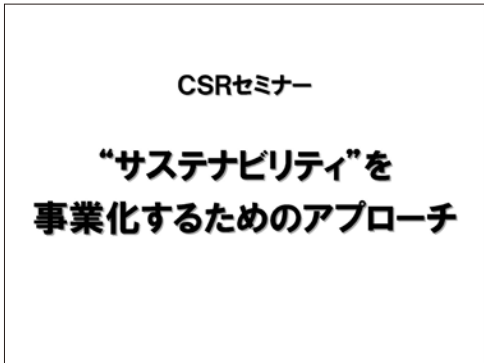
理想的な会場づくり



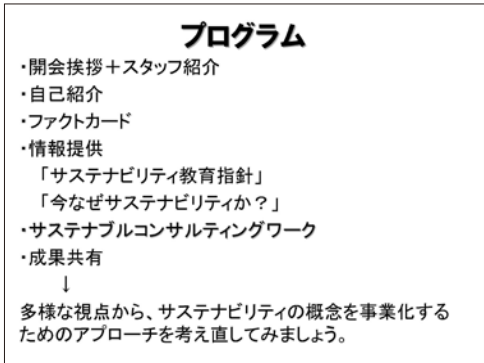
0:00 (10分)開会挨拶 (資料①、資料②)
セミナー開催の目的とプログラム概要の説明、ファシリテーターをはじめとするスタッフの紹介等を行う。

0:10 (20分)チェックイン
空いているスペースに、椅子のみでサークルをつくるなどし、参加者全員が自己紹介し合う。マーカーを各自に渡し、紙の表側に「どこの誰」、裏側に「セミナーに参加した理由」「セミナーへの期待」等を記入して、それを他の参加者に見せながら一人ずつ発言するのも良い。
また、それぞれの自己紹介を記入した紙は、裏面を示すようにして、壁などに貼っておくと良い。

スクリーン投影用資料案



資料①



資料②

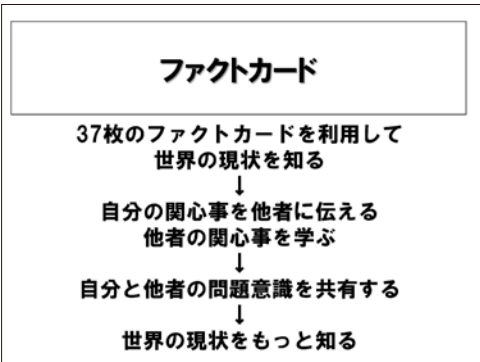


0:30 (20分)グループワーク1：ファクトカード (資料③)
まず、企業に勤務している参加者数名に、各社の事業内容について簡単に説明してもらおう。そのなかから、セミナーを通して、ワークのモデルになる企業を3社～5社（参加者の人数によって調整する）選び、該当する企業に所属する参加者が分かれるようグループ編成をする。

●ファクトカード (※P.29～P.62)
グループ別に分かれた机の上に、ファクトカードを準備する。37枚で1セットのカードの表には地球環境などに関する問題やキーワード、裏にはその回答あるいは解説が書いてあるので、それらに目を通し、参加者各自が最も興味関心が高いカードを選ぶ。
それぞれに選んだカードを示し、グループメンバーに読み伝え、そのカードを選んだ理由を説明する。
その後、それぞれの問題意識の共有、また解決方策案などについて話し合い、可能であればESDに関連づけたアプローチをする。日頃、個々の中に潜在している意識を相互に刺激し合うことによって掘り起こし、各々がサステナビリティに主体的に対峙することを促す起因としたい。
また、グループメンバー同士の親睦を深めるためにも、本ワークは有効である。



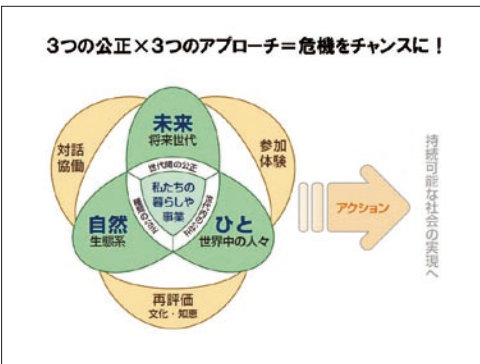
0:50 (10分)情報提供
指針（簡易版） (※P.24～P.27) を配付し、サステナビリティを実現するために必須である“3つの公正”と、その理念を現実のかたちにつなげるための“3つのアプローチ”を紹介する。(資料④、資料⑤)
また、「今、なぜ、“サステナビリティ”か？」という問いについて、社会を持続不可能とする具体的な課題（たとえば環境問題、貧困問題、ジェンダー問題、平和問題など）の現状、またその解決に向けた社会の動きなどについて説明する。(資料⑥)



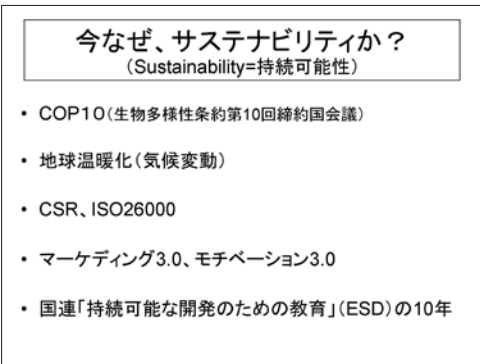
資料③



資料④



資料⑤



資料⑥

1:00 (90分) サステナブルコンサルティングワーク (資料⑦)

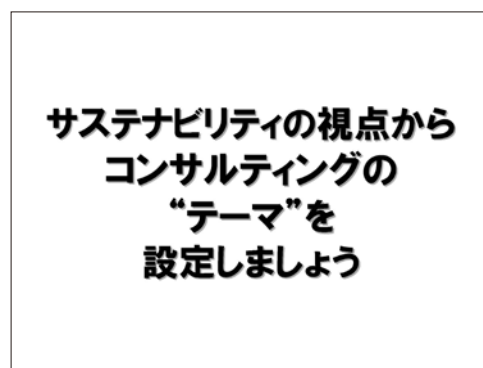
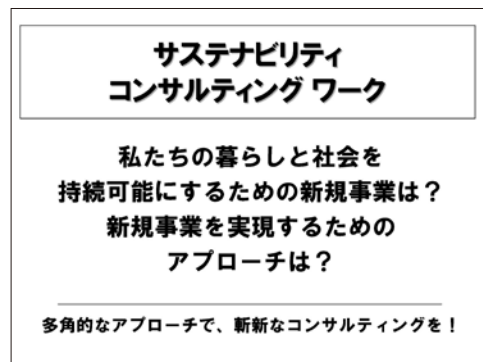
企業内部の参加者のみならず、企業外の多様な所属・分野の参加者が意見を交わし合うことにより、多角的な視点から企業活動を捉え直し、斬新なコンサルティングを試みる。

- アイデア出しのテーマを設定する(10分)(資料⑧)
一見CSRとは関わりのないように見える事業や商品・サービスを動詞的に言い換え、これを、コンサルティングのアイデアとなるテーマとして設定する(例えば、自動車製造メーカー=移動する喜びを提供する、進学塾=人を育てる場を提供、エネルギー供給会社=人の暮らしを明るくする・地域から地球を元気にする、通信事業会社=気持ちに届くような情報を運ぶ ※P.16にも用例)。時間のない場合は、ファシリテーターが予め用意したキャッチコピーを提示してもよいが、可能な限り、グループワークで生み出したい。

以上のような言い換えを施し、各企業の性格をシンプルに表現することで、新規事業の方向性が捉えやすくなる。



資料⑦



資料⑧

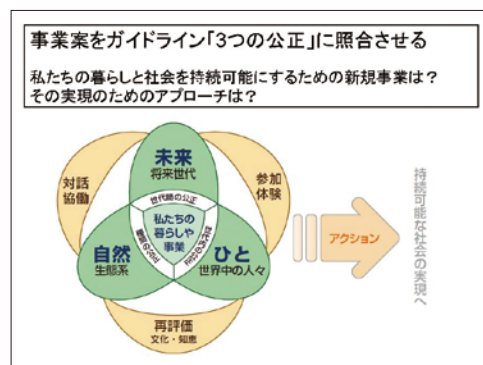
- ディスカッション(15分)
動詞的に言い換えられたテーマを発想の切り口に、CSRアクションとなる新規事業のアイデアについてディスカッションする。その際、「私たちの暮らしと社会を持続可能にするための新規事業は？」「新規事業を実現するためのアプローチは？」という2層のテーマを設定すると進行がスムーズになる。生まれたアイデアは、グループメンバー各自で模造紙に書き留めてゆく。各グループに、模造紙とカラーマーカーの準備をしておき記録に備えておくとうまい。



- まとめ1(10分)
白紙を複数枚グループ別に配り、発表の準備を進める。起承転結を意識した構成にすると発表しやすくなる。

- 発表1(15分)
各グループの代表が、新規事業案とその実現のためのアプローチについて発表をする。

- ガイドラインとの照合(15分)(資料⑨)
コンサルティングワークによって見出した事業案を、ガイドラインの“3つの公正”に照合させる。
「自然」「ひと」「未来」のどこに重心があるのか、また、サステナビリティの要件を満たすためには、どの部分への意識が不足しており注力が必要かについて再びグループメンバーでディスカッションをし、事業案とアプローチ案について見直す。



資料⑨

- まとめ2(10分)
白紙を複数枚グループ別に配り、発表の準備を進める。

- 発表2(15分)
各グループ代表がガイドラインと照合し見直した案を発表する。

- 2:30 (5分) プログラムレビュー
プログラムを振り返り、その上で、本セミナーがガイドラインの“3つのアプローチ”を意識した手法をとっていたことを説明する。
様々なステークホルダーとの対話の重要性、知恵を出し合うことの必要性、参加型・体験型といった学びのスタイルの有効性、事業案を作ることでバックキャストिंग的にその実現のためのアプローチを考えることの意義などについても触れておきたい。

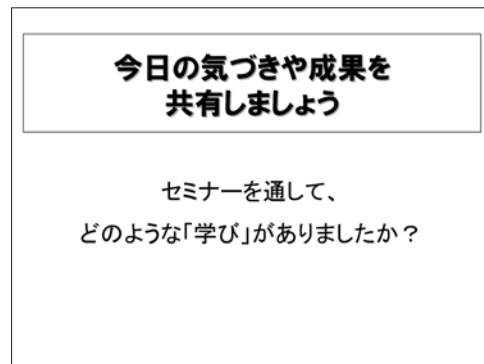
- 2:35 (20分) チェックアウト(資料⑩)
チェックイン時と同様のスタイルで、1人ずつ本セミナーの感想・気づき・発見などについて述べ合う。

- 2:50 (5分) 閉会の言葉
セミナーを通して見出された成果や課題を客観的な視点から述べ、全体を総括する。

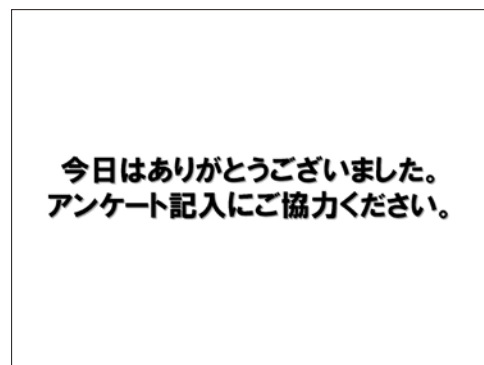
- 2:30 終了(資料⑪)
できるだけ、参加者にアンケート(※P.64)への回答を依頼し、フィードバックを得て今後のセミナーに役立てる。

- ◎セミナー実施者から
●様々なバックグラウンドを持つ参加者の集合体で行うセミナーなので、多彩な意見を相互に活かし合いながら、既成の概念を飛び越えた斬新な発想をいかに引き出すかが鍵になってくる。
●セミナーで初めて出会う人同士が自然にうち解けられるよう、チェックインとチェックアウトを丁寧に行い、各ワークの活性化をはかることがポイント。
●事前の参加申込みが可能であれば、参加者リストを確認しておき、モデルとなる企業を予め決めておくとう進行がスムーズになる。
●サステナビリティの意識が高い参加者が多いことが想定されるので、ガイドラインの“3つの公正”“3つのアプローチ”をディスカッションの契機として捉え、説明は簡単に済ませて良い。

- ◎セミナー参加者の方々からのご感想
●事業を実現するためのアプローチを考えることで、「わかる」<「できる」<「やる」についての理解が深まった。セミナーの「before」と「after」を意識的に考えてゆきたい。
●ファクトカードのワークによって、我々の住む世界が危機を迎えていることをもっと早く知り、対応する必要があることを実感した。またウォームアップにもなり良かった。
●サステナビリティコンサルティングワークは、異業種間の交流にもつながり、気づきが多かった。
●サステナビリティコンサルティングワークで出たそれぞれのグループの事業案を組み合わせると、さらに面白い事業が生み出せるのでは…と思った。
●一つのテーマについて話す前に、テーマやコンセプトなどを共有することが大切だということを知った。
●名詞からでなく動詞から発進する手法(※P.20参照)がとても新鮮だった。
●理解を深めるためには、あらゆるステークホルダーの人と意見を出し合うことが大切であると実感した。
●ESDとCSRがつながっていること、CSRの内容を決めるプロセスが大事であることに気づくことができた。
●ESDの視点で新規事業を立ち上げるという発想に驚かされた。



資料⑩



資料⑪

資料および教材

0. 資料と教材について

1. 指針 (簡易版)

プログラムの参加者に配付しやすいよう、「第1部：指針」の内容を、両面1枚にまとめました。本指針は、各プログラムの骨子になるため、1人あたり1枚を配付できるよう印刷し、準備しておくことをお勧めします。

2. セヴァン・スズキ「伝説のスピーチ」

1992年6月にリオデジャネイロで開催された「環境と開発に関する国連会議(環境サミット)」において、当時、12才であったセヴァン・スズキが行った“伝説のスピーチ”の日本語翻訳バージョンです。参加者に配付して相互に朗読し合うことで、「サステナビリティとは何か？」を考える際の糸口になるのみならず、プログラムのアイスブレイクにもつながってゆきます。

3. ファクトカード

環境問題や社会問題など持続可能な社会を作る上での世界的な課題について学ぶための37枚のカードです。表には課題に関する問題やキーワードが、裏にはその答えや解説が書いてあります。それらを各グループの机の上に広げ、参加者各自がもっとも興味関心のあるカードを選び、内容を理解した後、同じグループのメンバーに紹介、自分がそのカードを選んだ理由などを伝えるというような手順で使します(様々な使い方のバリエーションが考えられると思います)。世界中の課題が相互に関連し合っていることに気づき、それらを多様な視点で共有することで、自然とESDの感覚を養うことが期待できます。

4. アンケート (例)

プログラムは、その都度の参加者からのフィードバックを得て、それらを次回につなげてゆくことで、より充実したものに育ってゆきます。また、各参加者の所属する機関において、プログラムの学びを具体的な活動に展開させるヒントを発掘する手段にもなりますので、アンケートの回答内容をまとめ、プログラムの実施依頼者と共有することをお勧めします。

資料と教材は、下記URLからダウンロードすることができます。

配付資料の印刷の際などに、ご活用ください。

1. 指針 (簡易版)

表 http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/program/guidline_uchi.pdf

裏 http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/program/guidline_soto.pdf

2. セヴァン・スズキ「伝説のスピーチ」

http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/program/message_Severn.pdf

3. ファクトカード

<http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/program/factcard.pdf>

4. アンケート (例)

[http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/program/questionnaire_e.g.\).pdf](http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/program/questionnaire_e.g.).pdf)

立教大学 ESD 研究センター紹介

立教大学ESD 研究センター（ESDRC）は、ESD（Education for Sustainable Development、持続可能な開発のための教育）が多様な社会活動の中で実質的に機能することを目標として、2007年3月に立教大学に設立されました。また、2007年6月には、『「持続可能な開発のための教育（ESD）」における実践研究と教育企画の開発』として、平成19年度の文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業に選定され、多種多様な研究活動の展開が国内外から期待されています。

ESD研究は、環境・経済・社会のあらゆる領域をカバーする学際的研究ですが、従来の研究は、個々の領域での研究活動が主となることが多く、総合的な「教育の再方向付け」の提言、教育システムの開発と実践、指導者・教育者の人材養成、研究活動・実践活動のネットワーク形成までには至っていません。当研究センターは、「環境教育」と「開発教育」を切り口として、人文・社会科学的視点からこれらの課題にアプローチし、アジア・太平洋地域におけるネットワークをさらに強化し、この分野の「ハブ」機能を果たすことを目指しています。

研究および実践活動は、テーマ別に、アジアチーム、太平洋チーム、CSR チーム、統括チーム、の4つのチームで行い、定期的な研究会に加え、シンポジウムや講演会、ワークショップやセミナーなどの公開を企画運営しています。

活動の内容や研究および実践の成果はウェブサイトで随時更新しております。こちらをあわせてご覧ください。

ESD 研究センター CSR チーム研究員

*印は執筆担当

阿部 治	立教大学 ESD 研究センターセンター長、社会学部教授、大学院異文化コミュニケーション研究科教授／千葉大学客員教授／持続可能な開発のための教育の 10 年推進会議（ESD-J）顧問／日本環境教育学会会長
川嶋 直*	立教大学 ESD 研究センター CSR チーム主幹、大学院異文化コミュニケーション研究科元特任教授／（財）キープ協会環境教育事業部シニアアドバイザー
岡本享二	ブレーメンコンサルティング（株）代表取締役／首都大学東京大学院ビジネススクール客員教授／東北大学大学院環境科学研究科特別講師
新谷大輔	（株）三井物産戦略研究所研究員／立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科非常勤講師
中西紹一	プラス・サーキュレーションジャパン代表取締役／立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科元非常勤講師
中野民夫*	（株）博報堂／ワークショップ企画プロデューサー／立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科非常勤講師
福田秀人	サステナブル・リサーチ代表／事業戦略アドバイザー／立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科非常勤講師

（2012 年 2 月現在）

本指針の作成にあたり、セミナーやワークショップにご参加いただいた多くの皆さまからのご協力を得ることができました。また、特に次の方々には、分科会での助言を賜るなど、多大なご尽力をいただきました。

琴浦譲氏、相模博氏、田井中慎氏、田中丈夫氏、林克彦氏、藤木勇光氏、森本高司氏

（特活）持続可能な開発のための教育の 10 年推進会議（ESD-J）

現在、次の方々と協力し、本指針に基づいた人材育成プログラムの開発を進めています。

青木将幸氏、上條直美氏、佐野淳也氏、西村勇也氏、吉澤卓氏

謹みまして、皆さまに深く感謝申し上げます。

■お問合せ先

立教大学 ESD 研究センター 〒171-0021 東京都豊島区西池袋 3-34-1

E-mail esdrc@grp.rikkyo.ne.jp

Tell 03-3895-2686

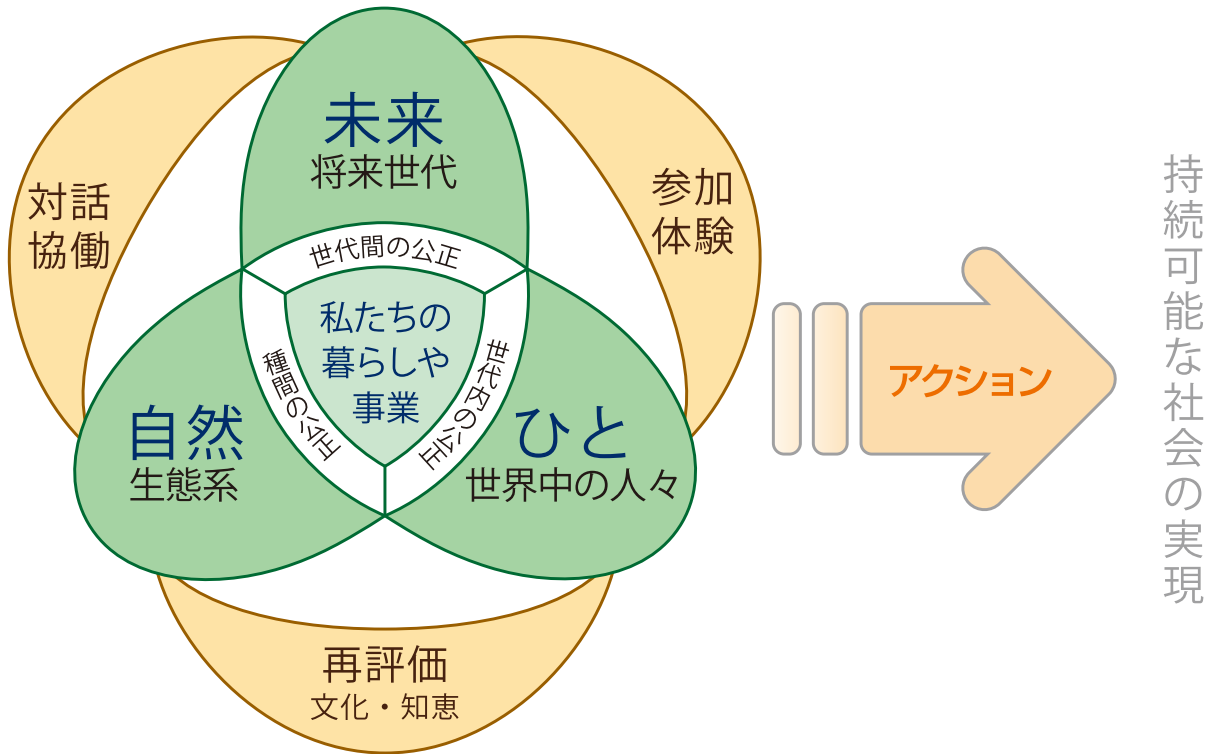
URL <http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/>



次世代 CSR におけるサステナビリティ教育指針

持続可能な社会の実現をめざす企業と企業人のための
ESD（持続可能な開発のための教育）ガイドライン

3つの公正×3つのアプローチ＝危機をチャンスに！



～感性と直観を重視した次世代CSRをめざして～

グローバル化が進み、また、あらゆるものごとが複雑に関係しあった世界に生きる私たちは、私たちの暮らしや企業活動が、自然環境や世界の人々、そして未来にも大きな影響を与えていることを深く自覚します。

持続可能な社会の実現に向けて、人や組織を活かしながら、社会はもとより自然界も健全に保たれるようなビジネスを追求します。

私たちの暮らしや企業活動が、世界の課題とつながっていることに気づき、そこから新たな発想を生むために、論理的思考だけでなく、社会的課題への「感性」と「直観」を大切にします。

サステナビリティに真正面から取り組む次世代CSRとして、ESD（持続可能な開発のための教育）を活用した企業人教育に取り組みます。

指 針

持続可能な社会の実現をめざす私たちは、以下の7つの指針に基づき、それぞれの立場と現場から、持続可能な社会づくりのために、サステナビリティに敏感な人材を育成することに取り組めます。

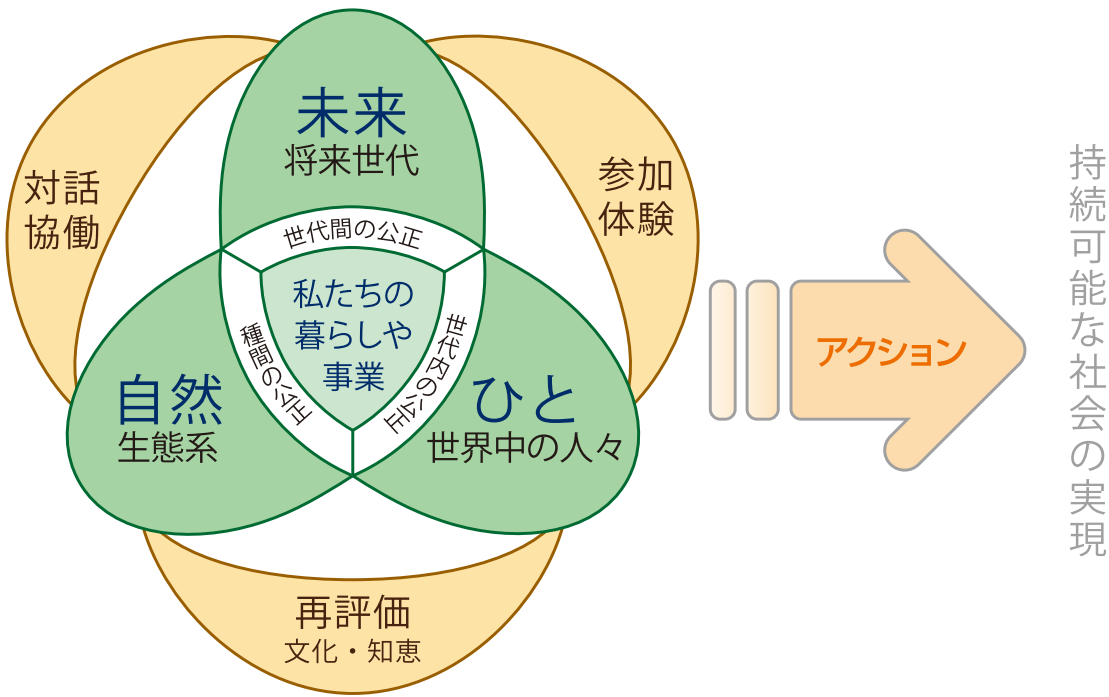
そのために、次の「3つの公正」の視点を持ち、「3つのアプローチ」をはかることで、「危機をチャンス」にしてゆきます。

アクション

●危機を「チャンス」に、積極的に取り組む

持続可能な社会づくりの課題に対し、敏感な対応ができないと、ビジネスにとって「リスク」になりますが、逆に積極的な取り組みができると「チャンス」(機会)として活かすことができます。私たちの暮らしや企業活動が世界の課題と関係していることをしっかりと見透し、人も社会も世界も持続できるビジネスを創出することができる企業人が生まれる環境づくりに取り組めます。

3つの公正×3つのアプローチ = 危機をチャンスに!



3つの公正

●世代間の公正〈未来・将来世代〉

将来の世代が、私たちと同等の環境を享受する権利があることを深く認識し、私たちの事業や暮らしが未来に与える影響を常に考え、行動に活かします。

●世代内の公正〈ひと・世界中の人々〉

私たちの事業や暮らしが、途上国をはじめ国内外の社会・経済的弱者とも関係していることを認識し、できるだけ負担を強くないよう考え、実践に努めます。

●種間の公正〈自然・生態系〉

人間と自然、ヒトとヒト以外の生物との関係を根本的に問い直し、人や社会の基盤である生態系からの発想を心がけます。

3つのアプローチ

●対話と協働

簡単な答えのない持続可能な社会の実現にむけて、多様な価値観を尊重し、これまでの常識にとらわれない新たな価値を創造するために、幅広い分野の関係者との「対話」を積み重ね、違いを活かして「協働」していきます。

●参加体験型の学び

自然や社会と私たちをつなげる「感性」や「直観」を育み、自分ごととして当事者意識や主体性を培うために、知識伝達型の教育だけでなく、ESDの実践の中で重視されてきた「参加体験型の学び」の手法を活用します。

●文化と知恵の再評価

各国各地域で忘れられかけている文化や伝統的な自然観などを見直し、そこから学べる知恵を再評価し、未来に継承発展させます。

資料および教材 2. セヴァン・スズキ「伝説のスピーチ」

1992年6月、ブラジル、リオ・デ・ジャネイロ。環境と開発に関する国連会議（環境サミット）に集まった世界の指導者たちを前に、12歳の少女、セヴァン・スズキは語り始めました。

こんにちは、セヴァン・スズキです。エコを代表してお話しします。エコというのは、子供環境運動（エンヴァイロンメンタル・チルドレンズ・オーガニゼーション）の略です。カナダの12歳から13歳の子どもたちの集まりで、今の世界を変えるためにがんばっています。あなたたち大人のみなさんにも、ぜひ生き方を変えていただくようお願いするために、自分たちで費用をためて、カナダからブラジルまで1万キロの旅をしてきました。

今日の私の話には、ウラもオモテありません。なぜって、私が環境運動をしているのは、私自身の未来のため。自分の未来を失うことは、選挙で負けたり、株で損したりするのとはわけがちがうんですから。

私がここに立って話をしているのは、未来に生きる子どもたちのためです。世界中の飢えに苦しむ子どもたちのためです。そして、もう行くところもなく、死に絶えようとしている無数の動物たちのためです。

太陽のもとにでるのが、私はこわい。オゾン層に穴があいたから。呼吸をすることさえこわい。空気にどんな毒が入っているかもしれないから。父とよくバンクーバーで釣りをしたものです。数年前に、体中ガンでおかされた魚に出会うまで。そして今、動物や植物たちが毎日のように絶滅していくのを、私たちは耳にします。それらは、もう永遠にもどってはこないんです。

私の世代には、夢があります。いつか野生の動物たちの群れや、たくさんの鳥や蝶が舞うジャングルを見ることです。でも、私の子どもたちの世代は、もうそんな夢をもつこともできなくなるのではないか。あなたたちは、私ぐらいの歳のときに、そんなことを心配したことがありますか。

こんな大変なことが、ものすごいいきおいで起こっているのに、私たち人間ときたら、まるでまだまだ余裕があるようなのんきな顔をしています。まだ子どもの私には、この危機を救うのになにをしたらいいのかははっきりわかりません。でも、あなたたち大人にも知ってほしいんです。あなたたちもよい解決法なんてもっていないっていうことを。オゾン層にあいた穴をどうやってふさぐのか、あなたは知らないでしょう

死んだ川にどうやってサケを呼びもどすのか、あなたは知らないでしょう。絶滅した動物をどうやって生きかえらせるのか、あなたは知らないでしょう。そして、今や砂漠となってしまった場所にどうやって森をよみがえらせるのか、あなたは知らないでしょう。

どうやって直すのかわからないものを、こわしつづけるのはもうやめてください。

ここでは、あなたたちは政府とか企業とか団体とかの代表でしょう。あるいは、報道関係者か政治家かもしれない。でもほんとうは、あなたたちもだれかの母親であり、父親であり、姉妹であり、兄弟であり、おばであり、おじなんです。そしてあなたたちのだれもが、だれかの子どもなんです。

私はまだ子どもですが、ここにいる私たちみんなが同じ大きな家族の一員であることを知っています。そうです、50億以上の人間からなる大家族。いいえ、じつは3千万種類の生物からなる大家族です。国境や各国の政府がどんなに私たちを分けへだてようとしても、このことは変えようがありません。私は子どもですが、みんながこの大家族の一員であり、ひとつの目標に向けて心をひとつにして行動しなければならいことを知っています。私は怒っています。でも、自分を見失ってはいません。私はこわい。でも、自分の気持ちを世界中に伝えることを、私はおそれません。

私の国でのむだづかいはいたいへんなものです。買っては捨て、また買っては捨てています。それでも物を浪費しつづける北の国々は、南の国々と富をわかちあおうとはしません。物があ

まっているのに、私たちは自分の富を、そのほんの少しでも手ばなすのがこわいんです。

カナダの私たちは十分な食べものと水と住まいを持つめぐまれた生活をしています。時計、自転車、コンピューター、テレビ、私たちの持っているものを数えあげたら何日もかかることでしょう。

2日前ここブラジルで、家のないストリートチルドレンと出会い、私たちはショックを受けました。ひとりの子どもが私たちにこう言いました。

「ぼくが金持ちだったらなあ。もしそうなら、家のない子すべてに、食べものと、着るものと、薬と、住む場所と、やさしさと愛情をあげるのに。」

家もなにもないひとりの子どもが、わかちあうことを考えているというのに、すべてを持っている私たちがこんなに欲が深いのは、いったいどうしてなのでしょう。

これらのめぐまれない子どもたちが、私と同じぐらいの歳だということが、私の頭をはなれません。どこに生れついたかによって、こんなにも人生がちがってしまう。私がリオの貧民街に住む子どものひとりだったかもしれないんです。ソマリアの飢えた子どもだったかも、中東の戦争で犠牲になるか、インドで物乞いをしていたかもしれないんです。

もし戦争のために使われているお金をぜんぶ、貧しさと環境問題を解決するために使えばこの地球はすばらしい星になるでしょう。私はまだ子どもだけどそのことを知っています。

学校で、いや、幼稚園でさえ、あなたたち大人は私たち子どもに、世のなかでどうふるまうかを教えてくださいます。たとえば、

- *争いをしないこと
- *話しあいでも解決すること
- *他人を尊重すること
- *ちらかしたら自分でかたづけること
- *ほかの生き物をむやみに傷つけないこと
- *わかちあうこと
- *そして欲ばらないこと

ならばなぜ、あなたたちは、私たちにするなということをしているんですか。

なぜあなたたちが今こうした会議に出席しているのか、どうか忘れないでください。そしていったいだれのためにやっているのか。それはあなたたちの子ども、つまり私たちのためです。みなさんはこうした会議で、私たちがどんな世界に育ち生きていくのかを決めているんです。

親たちはよく「だいじょうぶ。すべてうまくいくよ」といって子どもたちをなぐさめるものです。あるいは、「できるだけことはしてるから」とか、「この世の終わりじゃあるまいし」とか。しかし大人たちはもうこんななぐさめの言葉さえ使うことができなくなっているようです。おききしますが、私たち子どもの未来を真剣に考えたことがありますか。

父はいつも私に不言実行、つまり、なにをいうかではなく、なにをするかでその人の値うちが決まる、といいます。しかしあなたたち大人がやっていることのせいで、私たちは泣いています。あなたたちはいつも私たちを愛しているといいます。しかし、いわせてください。もしそのことがほんとうなら、どうか、ほんとうだということを行動でしめしてください。

最後まで私の話をきいてくださってありがとうございます。

セヴァン・スズキ「伝説のスピーチ」は下記文献より引用いたしました。

セヴァン カリス=スズキ (著) ナマケモノ倶楽部 (翻訳)
『あなたが世界を変える日—12歳の少女が環境サミットで語った伝説のスピーチ』
学陽書房、2003年7月

資料および教材 3. ファクトカード

数千万年かけて地球が作った資源を
100年で使い切ろうとしています。

投入されたエネルギーの60パーセントが
家まで届きません。

数千万年かけて地球が作った資源を 100年で使い切ろうとしています。

石油は、2億3千年前から数千年前に海中でプランクトンの死骸などが堆積し、地下の高温や圧力の影響を受け、長い年月を経て、変化してできたものです。

石油火力発電、ガソリン、プラスチック製造など、人類は、20世紀以降、石油を使用することで文明を発展させ、経済を成長させてきました。

しかし石油の埋蔵量は、すでに底が見えてきています。このままではあと40年でなくなるともいわれています。

参考：

地球市民村事務局編『私にできることは、なんだろう』（アスコム、2006年）99頁・FoEジャパン

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

投入されたエネルギーの60パーセントが 家まで届きません。

投入した石油や石炭のエネルギーを100とするとそのうちの60以上は、発電所から熱エネルギーとなり海や大気に出て行きます。

それは温暖化や大気汚染の原因になります。

さらに電気が電線を伝わる間にもエネルギーは失われます。

便利で安い生活の裏にあるのは、乱暴なエネルギー利用です。

参考：

地球市民村事務局編『私にできることは、なんだろう』（アスコム、2006年）74頁・自然エネルギー推進市民フォーラム

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

エネルギーは、上位10ヶ国で全体の 65%を消費しています。

再生不能なエネルギーが 全体の8割を占めています。

エネルギーは、上位10ヶ国で 全体の65%を消費しています。

残りの35%を180以上の国で分け合っています。10ヶ国とは、アメリカ、中国、ロシア、日本、ドイツ、インド、カナダ、フランス、イギリス、韓国です。これらの国は同時に二酸化炭素も多く排出しています。

参考：

阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』（山と溪谷社、2007年）7頁

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

再生不能なエネルギーが 全体の8割を占めています。

世界の消費エネルギーの8割が、原子力発電を含む枯渇性エネルギーです。このまま使い続けると、将来かならずエネルギー資源は足りなくなります。

参考：

阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』（山と溪谷社、2007年）7頁

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

13分に1種、生き物が絶滅しています。

世界の34地域に、全世界の植物の半数が 生存しています。

13分に1種、生き物が絶滅しています。

地球上の生物種の数、数百万とも億ともいわれます。

人間によって分類され、名前がつけられているものはそのうち、約150万種に過ぎません。

種の絶滅は、複雑に絡み合う生態系のバランスを崩し、やがて人間の生存をも脅かすでしょう。

現在では、1日に110種、1年に4万種の生き物が絶滅しているという説もあります。

参考：

地球市民村事務局編『私にできることは、なんだろう』（アスコム、2006年）177頁・生態教育センター

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

このままでは100年後に
熱帯雨林はなくなります。

世界の34地域に、全世界の植物の半数が 生存しています。

生物多様性を守るうえで大切な地域を生物多様性ホットスポットといいます。1,500種以上の固有植物種があり、その70%以上が本来の生育地をすでに失っていて、保全の必要性が高い地域のことです。

現在世界中にホットスポットは34地域。マダガスカルやフィリピン諸島、チリ中部などです。地球上の陸地面積のわずか2.3%を占めるに過ぎないこの地域に、全世界の50%の維管束植物種と42%の陸上脊椎動物種が生存しています。日本列島もホットスポットのひとつです。

参考：環境用語集

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

すでに地球の陸地の1/4は砂漠です。

このままでは100年後に熱帯雨林はなくなります。

この1秒で、およそサッカーグラウンド1つ分の熱帯雨林が伐採されています。このスピードでは、いずれ地球上の半分の生きものが絶滅します。保水力がなくなり、大洪水が起きるでしょう。熱帯雨林が作り出す大気中の酸素にも影響があるかもしれません。

参考：

阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』（山と溪谷社、2007年）7頁

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

洪水の被災者数は20年間で 6.9倍に増えました。

すでに地球の陸地の1/4は砂漠です。

サハラ砂漠は毎年5キロずつ南に広がっています。地球全体では毎年九州と四国を合わせた面積が砂漠化しています。拡大要因の多くは人為的なものです。

参考：

阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』（山と溪谷社、2007年）7頁

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

ホッキョクグマの体には、 化学物質がたまっています。

洪水の被災者数は20年間で 6.9倍に増えました。

1990年以降、世界中で洪水の被害が増えています。1973年から77年は平均1900万人だったのが、1993年から97年は1億3100万人に増えました。世界中で起きた異常気象の影響と考えられます。

参考：

阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』(山と溪谷社、2007年)7頁

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

ホッキョクグマの体には、 化学物質がたまっています。

北極には、風や海流によって、世界中で出された有害な化学物質が集まってしまいます。食物連鎖の頂点にいるホッキョクグマは「生体濃縮」が著しいのです。気候変動とあわせ、一時の乱獲から保護されて以降、また徐々に数を減らしています。

参考：

阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』(山と溪谷社、2007年)7頁

WWFジャパンウェブサイト

<http://www.wwf.or.jp/activities/wildlife/cat1014/cat1050/#2>

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

あなたの携帯電話とゴリラは つながっています。

サハラ以南のアフリカでは、1000人 のうち、600人以上が病気です。

あなたの携帯電話とゴリラは つながっています。

あなたの携帯電話につかわれているレアメタルの一つ、「タンタル」はアフリカのコンゴ民主共和国（以下コンゴ）でも産出されています。

携帯電話の爆発的な普及にあわせてタンタル需要も急増し、採掘のためにジャングルが荒らされました。内戦や密猟の影響も含め、コンゴのゴリラは激減し、絶滅の危機に瀕しています。

参考：ケータイゴリラウェブサイト

<http://keitai-gorilla.org/index.html>

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

サハラ以南のアフリカでは、1000人のうち、 600人以上が病気です。

10人家族なら、おじいさんとおばあさん、おとうさんと子ども3人が病気です。おかあさんと子ども3人で10人分の水・食糧・燃料を確保しなければなりません。

参考：

阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』（山と溪谷社、2007年）7頁

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

30秒に1人の子どもが、 マラリアで命を落としています。

感染者数はピークを越えましたが、 まだ500万人が治療を受けられていません。

30秒に1人の子どもが、 マラリアで命を落としています。

世界では毎年100万人以上が、マラリアで命を落としています。

アフリカでは、30秒に1人です。

これまで治療に用いられてきた薬は、耐性のために効かなくなりつつあります。

それに代わる新しい治療薬は、目処がたちつつありますが、まだ実際に効果をあげるまでには至っていません。

参考：地球市民村事務局編『私にできることは、なんだろう』（アスコム、2006年）35頁・国境なき医師団

国境なき医師団ウェブサイト 新しいツールや取り組みによる治療の進展

<http://www.msf.or.jp/news/2011/01/5079.php#6>

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

感染者数はピークを越えましたが、 まだ500万人が治療を受けていません。

2008年時点のエイズ感染者は全世界で3340万人。ピーク時よりも感染者数は減りましたが、発展途上国では最新の抗レトロウイルス薬による治療を受けられない人が500万人います。

参考：

国境なき医師団ウェブサイト

エイズ予防財団 HIV／エイズと生きるための7つのQ&A

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

妊娠や出産が原因で、 1分に1人の女性が命を落としています。

5人に1人は小学校に行っていません。

妊娠や出産が原因で、 1分に1人の女性が命を落としています。

そのうち99パーセントは途上国の女性です。貧困、栄養不足、交通が不便などの理由で、
必要な検診や医療サービスを受けることができないのです。

参考：

地球市民村事務局編『私にできることは、なんだろう』（アスコム、2006年）81頁・ジョイセフ

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

5人に1人は小学校に行っていません。

アジアでは、小学校就学年齢の子どもの約20パーセントが未就学です。
行きたくても行けない子どもがいます。
行ったらけれど辞めてしまう子どもがいます。
校舎や先生の不足、教材の不備といった体制が理由の場合もあります。

そしてそのうち約60パーセントは女の子です。
男の子なら学校へ。女の子は家のことを。そんな地域があります。

参考：

地球市民村事務局編『私にできることは、なんだろう』（アスコム、2006年）155頁・シャンティ国際ボランティア会

阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』（山と溪谷社、2007年）7頁

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

世界の子どもの7人に1人が 児童労働をしています。

世界で作られる穀物で、 世界の人が食べていけます。

世界の子どもの7人に1人が 児童労働をしています。

手縫いのサッカーボールやカカオ豆、コーヒーやバナナ、Tシャツの原料となるコットン、携帯電話の基盤に使われるレアメタルやダイヤモンド。わたしたちの回りには、児童労働に関係しているモノがたくさんあります。児童労働はわたしたちのくらしと無関係ではありません。

2004年と2008年の推計を比較すると、児童労働者の数は2億2200万人から約700万人減少しましたが、以前に比べると減少のペースが落ちています。

参考：NGO ACEウェブサイト <http://acejapan.org/modules/tinyd2/>

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

世界で作られる穀物で、 世界の人々が食べていきます。

2005年現在の人口、63億。世界で作られる穀物は19億トン。100億人を養う量です。

世界の5分の1にあたる先進国の人々が、穀物の40パーセントを使っています。

中でも日本は世界最大の穀物輸入国。

世界で飢餓に苦しむ人は8億5200万人。食糧は足りないのではありません。

参考：

地球市民村事務局編『私にできることは、なんだろう』（アスコム、2006年）227頁・日本国際飢餓対策機構
立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

5800万トン買って、1/3捨てています。

世界1位の死因は、飢えと栄養不足です。

5800万トン買って、1/3捨てています。

日本の食物のカロリー自給率は40パーセント。半分以上、海外から買っているのに、その1/3の1940万トンを捨てています。

参考：

地球市民村事務局編『私にできることは、なんだろう』（アスコム、2006年）229頁・日本国際飢餓対策機構

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

世界1位の死因は、飢えと栄養不足です。

飢えと貧困が原因で、毎日2万5000人が亡くなっています。

1950年と比べて、穀物・肉・牛乳の生産量は3倍になったのに、あいかわらず広い範囲で飢餓が起こっています。世界には、すべての人が食べるのに十分な食糧があるのに、8億人以上の人が常におなかをすかせています。

食べ物はお金のあるところに過剰に集まり、お金のないところの状況は変わりません。

参考：

阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』（山と溪谷社、2007年）7頁

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

世界の貧困人口10億のうち、 8億はアジアに集中しています。

開発途上国の農村部で暮らす女性は、 毎日6～8時間、水くみや薪集めをしています。

世界の貧困人口10億のうち、 8億はアジアに集中しています。

1日当たり所得が1ドル以下という貧困人口は、世界で約10億人。その8割がアジア、とくにバングラデシュなど、南アジアに集中します。

そして、この10年間、この数字はかわらないままです。

参考：

地球市民村事務局編『私にできることは、なんだろう』（アスコム、2006年）133頁・オイスカ
阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』（山と溪谷社、2007年）7頁

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

開発途上国の農村部で暮らす女性は、 毎日6～8時間、水くみや薪集めをしています。

水場まで歩いて2時間。10キロの水を背負って帰りは3時間。翌日は一日中薪集め。こんな日々を過ごしている女性は珍しくありません。

参考：

阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』（山と溪谷社、2007年）7頁

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

2025年、地球の人口は92億人です。

世界人口の50%は 都市に住んでいます。

2025年、地球の人口は92億人です。

急激な人口増加はアフリカ、アジア、ラテンアメリカで起こっています。
一方で、出生率が下がっている先進国の人口は減少します。

2025年、日本の人口は1億2千万人を下回るとされています。

参考：

阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』(山と溪谷社、2007年)7頁

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

世界人口の50%は都市に住んでいます。

自然とともに暮らしていた人々が、その環境を失って都市部に移動します。
仕事をみつけられず、貧しいままならスラム暮らしが待っています。

参考：

阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』(山と溪谷社、2007年)7頁

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

植物由来の薬の75%は、先住民族の経験と 知識が基礎になっています。

世界全体の富の3/4が上位10ヶ国に 集まっています。

植物由来の薬の75%は、先住民族の経験と知識が基礎になっています。

実験室で科学的に作られている薬ですが、そのもとにあるのは、どの植物がなんの病気に効くのかを知っていた先住民族の知恵なのです。

参考：

阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』(山と溪谷社、2007年)7頁

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

世界全体の富の3/4が上位10ヶ国に集まっています。

世界全体の国民総所得（GNI）の上位10ヶ国、アメリカ、日本、ドイツ、イギリス、フランス、中国、イタリア、カナダ、メキシコ、スペイン。残りのたった1/4を、180以上の国で分け合っているのです。

そして世界平均では、生活水準は悪化しています。グローバル化の進展により貧富の格差が増大します。働いても働いても誰かに吸い上げられて豊かになれない人々がいいます。

参考：

阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』(山と溪谷社、2007年)7頁

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

水を飲んでおなかをこわし、脱水症状に陥って亡くなる子どもの数は1日4000人。

開発途上国が輸出用の農作物を育てているのは、借金の返済のためです。

水を飲んでおなかをこわし、脱水症状に陥って亡くなる子どもの数は1日4000人。

蛇口をひねれば「飲める水」が出てくることは、当たり前のことではありません。透き通った水を見たことがない子ども、生きるために泥水を飲むしかない子どもがいます。

参考：

阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』（山と溪谷社、2007年）7頁

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

日本を食べさせるために、世界の水が使われています。

開発途上国が輸出用の農作物を育てているのは、借金の返済のためです。

開発途上国では、珈琲、たばこ、綿花などをたくさん栽培しています。収穫された産物は先進国に輸出され、売上げは先進国からの借金の返済に充てられます。

参考：

阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』（山と溪谷社、2007年）7頁

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

裕福な国の子どもは、開発途上国の子どもの30～50倍の資源を消費します。

日本を食べさせるために、 世界の水が使われています。

日本に輸出する農産物を育てるために、世界各地で使われる水は、日本の国内総使用量の2.7倍です。一方で世界の1/5の人は安全な飲み水が手に入りません。

参考：

地球市民村事務局編『私にできることは、なんだろう』（アスコム、2006年）228頁・日本国際飢餓対策機構

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

裕福な国の子どもは、開発途上国の子どもの 30～50倍の資源を消費します。

子ども部屋にあふれる電子ゲーム機、ゲームソフト、おもちゃたち。毎日のおやつや快適な部屋。先進国のありふれた風景です。反面、おもちゃをみたことがない子どももいるのです。

参考：

阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』（山と溪谷社、2007年）7頁

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

環境の悪化は貧困・飢餓をもたらし、 社会不安や紛争を起こします。

化学肥料と農薬の乱用は、 水質汚濁や食物連鎖による化学物質の 拡散を引き起こします。

環境の悪化は貧困・飢餓をもたらし、 社会不安や紛争を起こします。

農地が砂漠化した環境難民や異常気象で引き起こされる飢饉。生きる環境が崩れると、明日を生きるために秩序やルールは二の次になります。

参考：

阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』(山と溪谷社、2007年)7頁

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

灌漑は塩害を引き起こします。

化学肥料と農薬の乱用は、水質汚濁や食物連鎖に よる化学物質の拡散を引き起こします。

より収穫量が多くなるよう品種改良した作物は、害虫に弱く、農薬が必要です。化学肥料も収量アップのために必要です。農薬に含まれる化学物質は食物連鎖を通じて大きな生きものへに影響を与え、余分な養分は水を通じて、水質に影響を与えます。

参考：

阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』(山と溪谷社、2007年)7頁

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

毎年の世界の軍事費総額1/3で、 持続可能な開発が実現できます。

灌漑は塩害を引き起こします。

大量の地下水をくみ上げた大規模農業は、一時期たくさんの収穫を上げ、成功したかのようでした。しかし、大量の塩が地表を覆うようになり、農業はできなくなりました。

かつて世界4位の大きさを誇ったアラル海は、旧ソ連の無謀な灌漑によって、面積が1/25以下になり、塩分濃度が5倍になりました。

参考:

阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』(山と溪谷社、2007年)7頁

<http://ja.wikipedia.org/wiki/アラル海>

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0

毎年の世界の軍事費総額の1/3で、 持続可能な開発が実現できます。

飢餓と栄養失調をなくす 健康管理してAIDSを抑制する

住まいを提供する きれいで安全な水を提供する

読み書きのできない人をなくす クリーンで安全なエネルギーを提供する

開発途上国の借金をなくす 人口の安定化

土壌浸食の防止 森林伐採の阻止 オゾン層破壊の防止 酸性雨の防止

地球温暖化の防止 地雷の撤去 難民救済 核兵器の廃絶

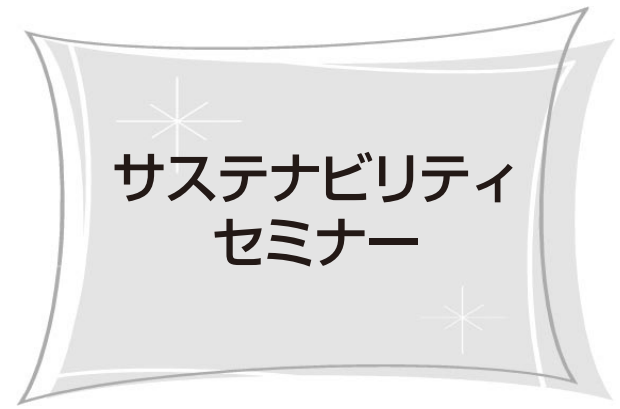
民主主義の樹立

参考: 阿部治・野田研一監修『持続可能な未来がわかる絵本』(山と溪谷社、2007年)7頁

<http://ja.wikipedia.org/wiki/アラル海>

立教大学ESD研究センターCSRチーム ファクトカードv1.0





資料および教材 4. アンケート(例)

フリガナ
氏 名
所 属

1. どういったことに関心がありましたか？ 参加の動機を教えてください。

コメント：

2. 本セミナーの満足度を教えてください。

☐ 満足 ☐ ほぼ満足 ☐ 普通 ☐ やや不満 ☐ 不満 ☐ その他 _____

コメント：

3. セミナーのテーマであった「サステナビリティ」あるいは「ESD」への理解度について教えてください。

☐ 理解できた ☐ ほぼ理解できた ☐ 解りにくい ☐ 解らない ☐ その他 _____

コメント：

4. セミナーを経て、どのような気づきや発見がありましたか？ご自由にお書きください。

コメント：

5. セミナーをさらに良くするために、改善案などお気づきの点がありましたら教えてください。

コメント：

6. 社内で始められそうなサステナビリティに関するアイデアがあれば、お書きください。

コメント：

7. その他、講師へのメッセージやご感想などございましたら、ご自由にお寄せください。

コメント：

ご協力ありがとうございました。

次世代 CSR におけるサステナビリティ教育指針

第3部 指 針(簡易版)各国語バージョン

1. 英語版

2. 中国語版

3. 韓国語版

About the Rikkyo University ESD Research Center

The ESD Research Center (ESDRC) at Rikkyo University was established in March 2007 with the objective of giving Education for Sustainable Development a substantive function within the diversity of society. In June 2007, it was chosen as part of the FY 2007 Open Research Center Project of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology concerning "Developing Research and Educational Programs on ESD." The various different ESDRC research activities are the object of high expectation in Japan and other countries.

ESD research is an interdisciplinary activity that covers all environmental, economic, and social fields. Most research has conventionally consisted mainly of work in these individual fields and has not reached the point of offering a comprehensive reorientation of education, the development and actual implementation of education systems, human resource development of educators and trainers, and networking of researcher and practitioner activities. The ESDRC takes environmental education and development education as avenues of approach to these issues from humanities and social sciences perspectives. The Center's aim is to further strengthen networks in the Asia and Pacific region and to serve as a hub for these endeavors.

There are four teams that pursue research and practical activities by topic. They are the Asia Regional Project Team, the Pacific Regional Project Team, the CSR Project Team, and the Overall Project Team. They plan and implement public disclosure by holding periodic research study groups in addition to symposiums, lecture meetings, workshops, seminars, and other such activities.

The content of programs and the results from research and practical activities are displayed on the Website and updated as needed.

CSR Project Team Researchers * Asterisks indicate the names of the lead authors.

Osamu Abe

Director, ESD Research Center, Rikkyo University, and Professor, College of Sociology and Graduate School of Intercultural Communication. Guest Professor, Chiba University. Advisor, Japan Council on the UN Decade of Education for Sustainable Development (ESD-J). President, Japanese Society of Environmental Education.

Tadashi Kawashima*

Leader, CSR Project Team, ESD Research Center, Rikkyo University, and formerly Specially Appointed Professor, Graduate School of Intercultural Communication. Senior Advisor, Environmental Education division, KEEP, Inc.

Kyoji Okamoto

President, Bremen Consulting Co., Ltd. Guest Professor, Business School of Tokyo Metropolitan University. Special Lecturer, Graduate School of Environmental Studies, Tohoku University.

Daisuke Shintani

Researcher, Mitsui Global Strategic Studies Institute. Lecturer, Graduate School of Social Design Studies, Rikkyo University.

Shoichi Nakanishi

President, Plus Circulation Japan Inc. Formerly Lecturer, Graduate School of Social Design Studies, Rikkyo University.

Tamio Nakano*

Hakuhodo, Inc. Workshop Project Producer. Lecturer, Graduate School of Social Design Studies, Rikkyo University.

Hideto Fukuda

President, Sustainable Research. Business Strategy Advisor. Lecturer, Graduate School of Social Design Studies, Rikkyo University.

(as of Feb. 2012)

Education for Sustainable Development Research Center, Rikkyo University

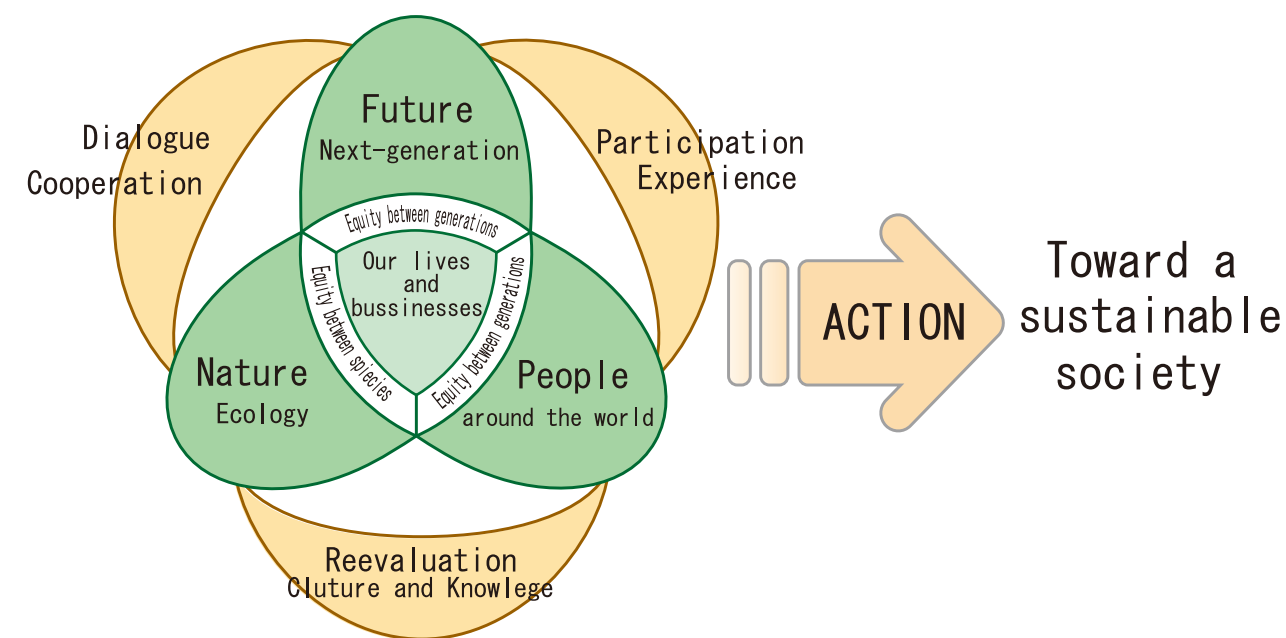
3-34-1 Nishi-Ikebukuro, Toshima, Tokyo 171-8501
TEL/FAX: +81-3-3985-2686
Email: esdrc@grp.rikkyo.ne.jp
URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/>



Guidelines for Sustainability Education in Next-generation CSR

**Education for Sustainable Development (ESD) Guidelines
for Corporations and Businesspeople Striving to Build a Sustainable Society**

Three equities × Three approaches = Transformation of risk into opportunity!



To establish next-generation CSR
based on sensibility and intuition

In the world we live in today, globalization is advancing to the point where everything is so intricately interconnected that there is no denying that our lifestyles and corporate practices have a tremendous impact on the natural environment, people around the world, and the future.

To build a sustainable society, we will seek to develop businesses that protect the soundness of the natural world, as well as society, while maximizing the potentials of individuals and organizations.

We will value sensibility and intuition in addressing social issues, instead of depending wholly on theoretical principles, so that new ideas may be born from the awareness that our lifestyles and corporate practices are deeply connected to world issues.

As next-generation CSR will need to face the challenge of promoting sustainability, we will concentrate on developing educational programs for businesspeople based on ESD.

Guidelines for Sustainability Education in Next-generation CSR

Guidelines

Our initiatives for a sustainable society are based on the following seven principles. We aim to develop human resources attuned to sustainability, so that each individual may contribute to building a sustainable society in their respective capacity and occupation.

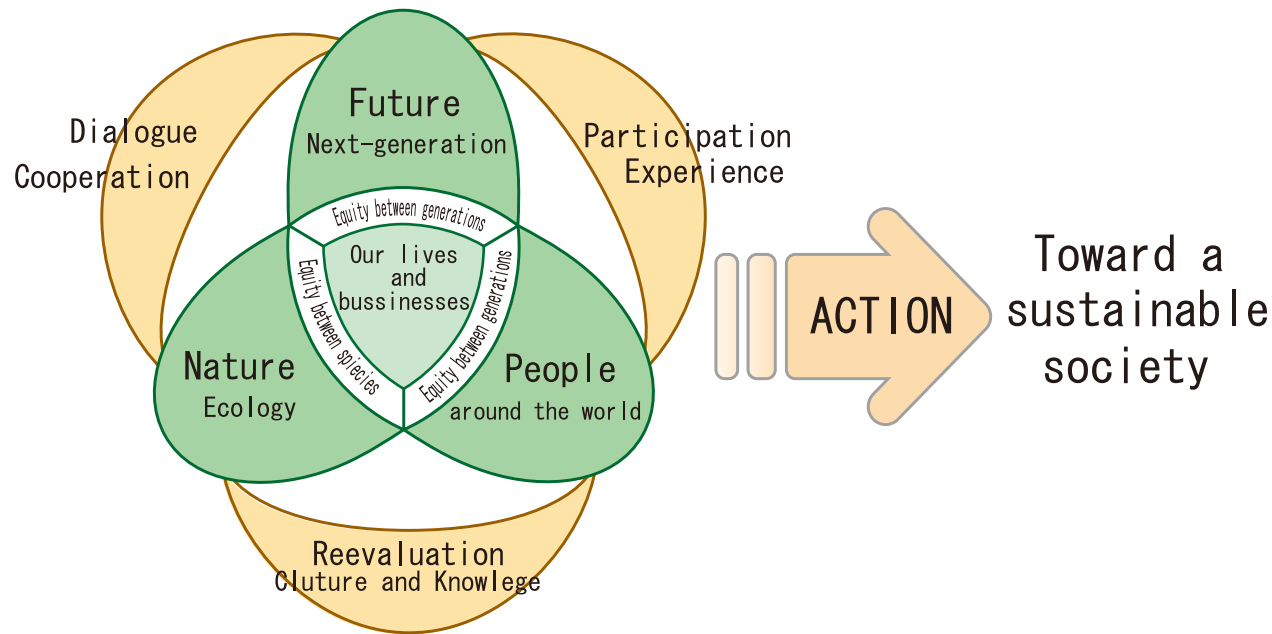
Toward this end, we propose to transform “risk into opportunity” through “**three approaches**” taken from the perspectives of “**three equities**,” as shown below.

Action

● Make active efforts to transform risk into opportunity

Businesses face a risk if they cannot respond promptly to issues relating to building a sustainable society. On the other hand, they can gain an opportunity by taking an active approach to such issues. Based on this understanding, we strive to create an environment that fosters businesspeople who have a clear understanding that our lifestyles and corporate practices are connected to world issues, and who can create businesses that bring sustainability to people, society, and the world.

Three equities × Three approaches = Transformation of risk into opportunity!



Three equities

● Equity between generations: the future and coming generations

With the realization that future generations have the right to enjoy the same quality of environment as our present generation, we must always act with conscious awareness of the impact of our lifestyles and businesses on the future.

● Equity within generations: individuals and humanity as a whole

Based on the awareness that our lifestyles and businesses can affect the lives of socially and economically disadvantaged people worldwide, we must think and take action to reduce the burden imposed on them as much as possible.

● Equity between species: nature and ecology

Carrying out a fundamental reexamination of the relationships between people and the environment, and between humans and other living organisms, we must address issues with an awareness of the ecologies in which our lives and societies are rooted.

Three approaches

● Dialogue and cooperation

Recognizing that there are no simple solutions to the problem of how we can achieve a sustainable society, we will respect diverse values and engage in extended dialogues with concerned parties in a wide range of fields, taking advantage of our differences and collaborating with one another to create new value that is unbound by the conventions of the past.

● Participatory learning

To nurture sensibility and intuition regarding our connection with nature and society, and to promote a sense of involvement and initiative regarding sustainability as “our own problem,” we will employ not only knowledge transference educational methodologies, but also the participatory learning methods that are a central focus of ESD.

● Reevaluation of culture and knowledge

We will reevaluate the regional cultures and traditional views of nature that are gradually being forgotten today, so that we can pass on and further expand their wisdom in the future.

立教大学ESD研究中心介绍

立教大学ESD研究中心（ESDRC）以ESD（Education for Sustainable Development、可持续发展教育）在各种社会活动中发挥实质性的作用为目标，于2007年3月在立教大学成立。并且，在2007年6月以“关于‘可持续发展教育（ESD）’的实践研究和教育企划的开发”为主题，被选为平成19年度（2007年度）文部科学省开放研究中心开发项目，在开展多种多样的研究活动方面受到日本国内外的期待。

ESD研究是覆盖环境、经济、社会等广泛领域的跨学科研究，以往的研究大多数以各领域的研究活动为主，尚还没有达到提出综合性的“教育重新定位”建议、开发和实践教育系统、培养领导者和教育家人才、形成研究活动与实践活动的网络的水平。本研究中心的目标在于以“环境教育”和“开发教育”为突破口，从人文和社会科学的视角来探讨这些课题，进一步强化亚洲和太平洋地区的网络，并发挥该领域的“中枢”功能。

我们将研究与实践活动按照主题分为亚洲小组、太平洋小组、CSR小组、总括小组的四个小组开展活动，除了定期研究会，我们还企划运营专题研讨会和演讲会、开办工作坊和讲座等。

我们随时在网站上更新活动内容以及研究与实践的成果。也请参阅我们的网站。

ESD研究中心 CSR小组研究员 *标志表示执笔人

阿部 治	立教大学ESD研究中心主任、社会学系教授、研究生院跨文化交流研究院教授／千叶大学客座教授／可持续发展教育的10年推进会议（ESD-J）顾问／日本环境教育学会会长
川嶋 直	立教大学ESD研究中心CSR小组主管、研究生院跨文化交流研究院前特任教授／（财）Keep协会环境教育事业部高级顾问
冈本享二	BREMEN CONSULTING(株) 董事长／首都大学东京研究生院商学院客座教授／东北大学研究生院环境科学研究院特聘讲师
新谷大辅	（株）三井物产战略研究所研究员／立教大学研究生院21世纪社会设计研究院讲师
中西绍一	（株）Plus Circulation Japan董事长／立教大学研究生院21世纪社会设计研究院前讲师
中野民夫	（株）博报堂／讨论会企划制作人／立教大学研究生院21世纪社会设计研究院外聘讲师
福田秀人	Sustainable Research代表／经营战略顾问／立教大学研究生院21世纪社会设计研究院讲师

(2012. 2)

立教大学ESD研究中心

邮编171-8501 东京都丰岛区西池袋3-34-1

电话/传真：81+(0)3-3985-2686

电子邮件：esdrc@grp.rikkyo.ne.jp

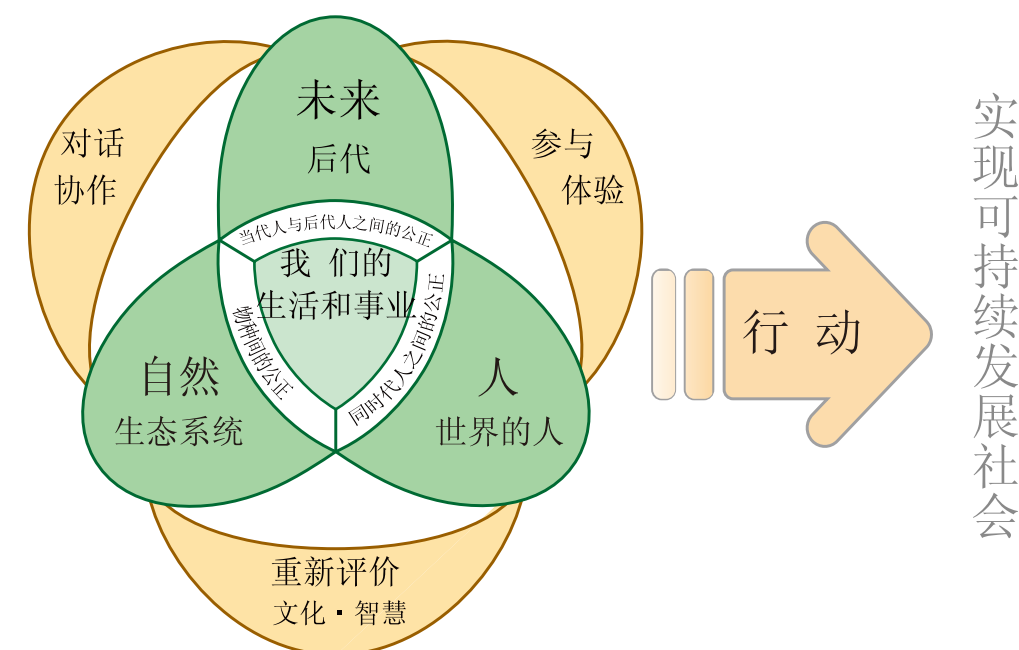
网址：http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/



新一代CSR的可持续发展教育准则

致力于实现可持续发展社会的企业与企业人的
ESD（可持续发展教育）指南

三个公正 × 三种方法 = 化危机为机遇！



确立重视感性与直观的新生代CSR

全球化进程加速、万事万物错综复杂，生活在这样的世界里，我们深切地感受到，我们的生活和企业活动正对自然环境、全世界的人类，以及未来带来深远的影响。

为了实现社会的可持续发展，我们追求的是发挥人与组织的作用，不仅使我们的社会，同时也使自然界获得健全发展的经济活动。

要想认识到我们的生活与企业活动是与全球性课题紧密联系在一起，并从中产生新的创意，不仅需要逻辑性的思考，更要重视对于社会性课题的“感性”与“直观”。

作为从正面致力于可持续发展的新生代CSR，我们将开展充分利用ESD（可持续发展教育）的企业人教育工作。

准则

为实现可持续发展的社会，我们遵循以下7个准则，分别从各自的立场与领域出发，培养对于“可持续性”具有敏锐领悟力的人才以建设可持续发展的社会。

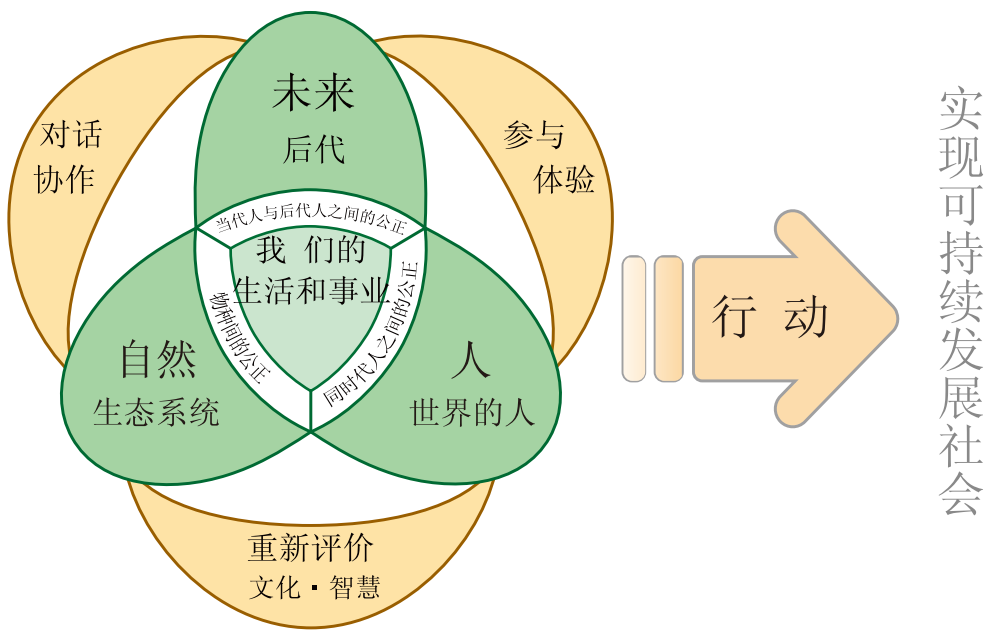
为此，我们将从下述“三个公正”的视角出发，通过“三种方法”，实现“化危机为机遇”。

行 动

●积极行动，化危机为“机遇”

如果对于可持续发展社会建设的课题不能进行敏锐地应对的话，那么就会给经济活动带来“风险”。相反，如果能够积极应对的话，就可以将其转化为“机遇”并加以活用。我们将致力于社会环境的建设，以培养能够真正看清我们的生活和企业活动与全球性课题之间所存在的密切关系，创造人与社会以及世界都能够持续发展的经济活动的企业人。

三个公正 × 三种方法 = 化危机为机遇！



三个公正

●当代人与后代人之间的公正〈未来・后代〉

深刻认识到我们的子孙后代拥有与我们享受同等环境的权利，时刻思考我们的生活与事业给未来带来的深远影响，并将其体现在我们的行动中。

●同时代人之间的公正〈人・全世界的人〉

认识到我们的生活和事业与包括发展中国家在内的、国内外社会 / 经济弱势群体之间存在密切的关系，认识到应尽可能不强加给他们负担，并努力付诸实践。

●物种之间的公正〈自然・生态系统〉

重新审视人类与自然之间的关系，尽量站在形成人与社会基础的生态系统的角度思考问题。

三种方法

●对话与协作

实现可持续发展的社会的方法没有一个标准答案。为追求这样的社会，我们要尊重不同的价值观，创造不拘泥于原有常识的新价值。为此我们需要不断地积累与广泛的各种领域的相关者之间的“对话”，发挥各自的不同之处，相互协作。

●参与体验式学习

为了培养将自然、社会和我们连接在一起的“感性”和“直观”，以及强烈的主人翁意识和主体性，不仅需要知识传授型的教育，还需要充分利用在ESD实践过程中一直以来受到重视的“参与体验式学习”手法。

●重新评价文化与智慧的价值

重新认识各国各地区正在逐渐被遗忘的文化和传统的自然观，重新评价能够从中汲取的经验智慧，并加以传承和发扬光大。

릿쿄대학 ESD 연구센터 소개

릿쿄대학 ESD연구센터(ESDRC)는 ESD(Education for Sustainable Development, 지속가능발전교육)가 다양한 사회 활동 속에서 실질적으로 기능하는 것을 목표로 하여 2007년 3월에 설립되었습니다. 또한 2007년 6월에는 『「지속가능발전교육(ESD)」에 있어서 실천 연구와 교육 기획의 개발』이라는 이름으로 2007년도의 문부과학성 오픈리서치센터의 정비 사업으로 선정되어 다양한 연구 활동의 전개가 국내외로부터 기대되고 있습니다.

ESD연구는 환경·경제·사회의 모든 영역을 커버하는 학제적 연구입니다만, 종래의 연구는 각각의 영역에서의 연구 활동이 중심이 되는 일이 대부분이어서 종합적인 「교육의 재방향 설정」의 제언, 교육 시스템의 개발과 실천, 지도자·교육자의 인재양성, 연구 활동·실천 활동의 네트워크 형성까지는 미치지 못하고 있습니다. 당 연구센터는 「환경 교육」과 지역의 네트워크를 더욱 강화시켜 이 분야에 있어서 「허브」기능의 수행을 목표로 삼고 있습니다.

연구 및 실천 활동은 테마별로 아시아, 태평양, CSR, 통괄이라는 4개의 팀에서 이루어지고 있고 정기적인 연구회는 물론 심포지엄, 강연회, 워크숍, 세미나 등의 공개를 기획 운영하고 있습니다.

활동의 내용이나 연구 및 실천의 성과는 이하의 웹 사이트에서 수시로 갱신하고 있습니다.

ESD연구센터 CSR팀 연구원

*표시는 집필 담당자

아베 오사무

릿쿄대학 ESD연구센터 센터장, 사회학부 교수, 대학원 이문화커뮤니케이션연구과 교수 / 치바대학 객원교수 / 지속가능발전교육의 10년 추진회의(ESD-J) 고문, 일본환경교육학회 학회장

카와시마 타다시*

릿쿄대학 ESD연구센터 CSR팀 주간, 대학원 이문화커뮤니케이션연구과 전 특임교수 / (재)키프협회 환경교육사업부 시니어어드바이저

오카모토 교지

브레멘 컨설팅(주) 대표 임원 / 슈토다이카쿠토쿄대학원 비즈니스스쿨 객원교수 / 토호쿠대학대학원 환경과학연구과 특별강사

신타니 다이ске

(주)미츠이보산 전략연구소 연구원 / 릿쿄대학대학원 21세기사회디자인연구과 강사

나카니시 쇼이치

(유)플러스·서클레이션재팬 대표 임원 / 릿쿄대학대학원 21세기사회디자인연구과 전 강사

나카노 타미오*

(주)하쿠호도 / 워크숍 기획 프로듀서 / 릿쿄대학대학원 21세기사회디자인연구과 강사

후쿠다 히데토

서스테이너블·리서치 대표 / 사업전략 어드바이저 / 릿쿄대학대학원 21세기사회디자인연구과 강사

(2012. 2)

릿쿄대학 ESD연구센터

171-8501 도쿄 토시마쿠 니시이케부쿠로3-34-1

TEL/FAX +81-3-3985-2686

E-mail esdrc@grp.rikkyo.ne.jp

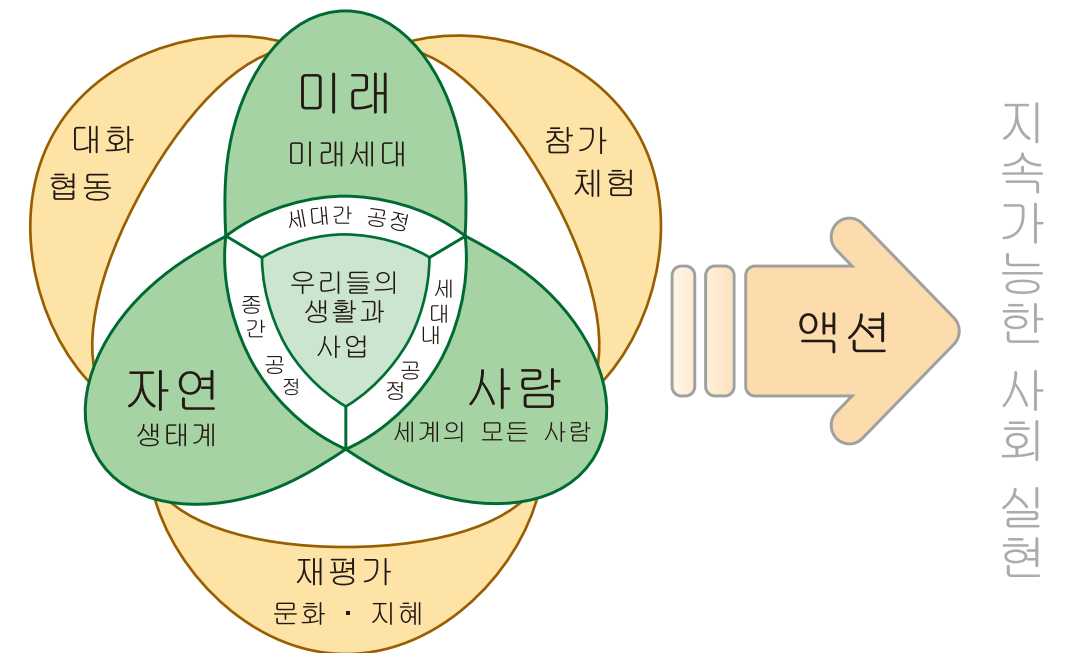
U R L <http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/>



차세대 CSR에서의 지속가능성 교육지침

지속가능한 사회 실현을 지향하는 기업과 기업인을 위한
ESD(지속가능발전교육) 가이드라인

3가지의 공정 × 3가지의 접근 = 위기를 기회로!



감성과 직관을 중시한 차세대 CSR의 확립을 위하여

글로벌화가 진척되고

또한 모든 일들이 서로 복잡하게 얽힌 세계에 살고 있는 우리는
우리들의 생활이나 기업 활동이 자연환경 혹은 세계의 사람들
그리고 미래에도 큰 영향을 끼치고 있다는 것을 깊이 자각합니다.

우리는 지속가능한 사회의 실현을 위하여
사회는 물론 자연도 건강하게 유지시킬 수 있는 비즈니스를 추구합니다.

우리들의 생활이나 기업 활동이 세계의 과제와 연결되어 있다는 것을 인식하고,
앞으로 새로운 발상을 만들어 내기 위해, 논리적 사고뿐만 아니라
사회적 과제에 대한 「감성」과 「직관」을 소중히 합니다.

지속가능성에 적극적으로 대처하고자 하는 차세대 CSR로서
ESD(지속가능발전교육)를 활용한 기업인 교육을 실시합니다.

차세대 CSR에서의 지속가능성 교육지침

지속가능한 사회 실현을 지향하는 기업과 기업인을 위한
ESD(지속가능발전교육) 가이드라인

지침

지속가능한 사회의 실현을 지향하는 우리들은 이하의 7가지 지침에 근거하여 각각의 위치와 현장에서 지속가능한 사회 만들기를 위해, 지속가능성에 민감한 인재를 육성하는 일에 임합니다.

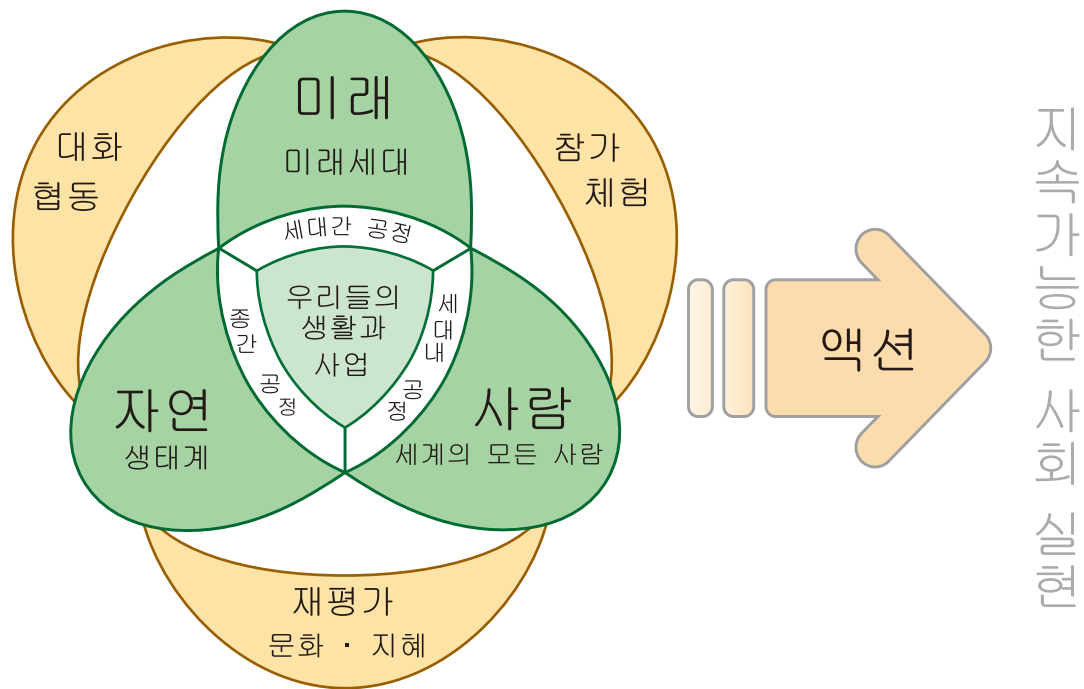
그러기 위해서 다음과 같은 「3가지의 공정」의 관점을 가지고 「3가지 접근」을 도모하여 「위기를 기회」로 만들어 갑니다.

액션

● 위기를 「기회」로, 적극적인 실천

지속가능한 사회만들기의 과제에 민감하게 대응하지 못하면 비즈니스에 있어서 「위기」가 되지만, 반대로 적극적인 대처가 가능하다면 「기회」로 활용할 수 있습니다. 우리의 생활이나 기업 활동이 세계의 과제와 연관되어 있음을 제대로 간파하여, 사람, 사회, 세계 모두 지속가능케 하는 비즈니스를 창출할 수 있는, 그런 기업인이 나오는 환경을 만들고자 합니다.

3가지의 공정 × 3가지의 접근 = 위기를 기회로!



3가지의 공정

● 세대간 공정 <미래·장래 세대>

장래 세대가 우리들과 동등한 환경을 누릴 권리가 있음을 깊이 인식하여, 우리들의 생활이나 사업이 미래에 끼치는 영향을 항상 생각하면서 행동합니다.

● 세대내 공정 <사람·세계의 사람들>

우리들의 생활이나 사업이 개발도상국을 비롯한 국내외의 사회·경제적 약자와도 관련되어 있음을 인식하여, 그들에게 될 수 있으면 부담을 강요하지 않도록 배려하며 사업을 전개합니다.

● 종간 공정 <자연·생태계>

인간과 자연과의 관계를 근본적으로 생각해보고 사람이나 사회의 기반인 생태계부터 생각하는 마음을 갖습니다.

3가지의 접근

● 대화와 협동

간단한 답이 없는 지속가능한 사회 실현을 위해서, 우리는 다양한 가치관을 존중하고 지금까지의 상식에 얽매이지 않는 새로운 가치를 창조하기 위해서는 폭넓은 분야의 관계자와 「대화」하여, 그 차이를 활용하여 「협동」해 나갑니다.

● 참가체험형의 배움

자연 및 사회와 우리들을 연결시키는 「감성」이나 「직관」을 육성하고, 「자기 일」이라는 주인의식이나 주체성을 기르기 위하여 지식전달형의 교육뿐만 아니라 ESD의 실천 속에서 중시되어 온 「참가체험형의 학습」 방법을 활용합니다.

● 문화와 지혜의 재평가

각국의 각 지역에서 잊혀져 가고 있는 문화나 전통적인 자연관 등을 재인식하여 거기에서 배울 수 있는 지혜를 재평가하여, 미래를 위해 계승·발전시킵니다.

次世代 CSR におけるサステナビリティ教育指針

持続可能な社会の実現をめざす企業と企業人のための ESD（持続可能な開発のための教育）ガイドライン（第 2.0 版）

発 行 日：2012 年 3 月

発 行 人：阿部 治・立教大学 ESD 研究センター CSR チーム

発 行 所：立教大学 ESD 研究センター

〒 171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

TEL/FAX：03-3985-2686

Email：esdrc@grp.rikkyo.ne.jp

U R L：http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/

事 務 局：照沼麻衣子

イ ラ ス ト：鈴木律子

Education for Sustainable Development Research Center, Rikkyo University



古紙パルプ配合率100%再生紙を使用

この製品(本文)は、古紙パルプ配合率100%の再生紙を使用しています。このマークは、3R活動推進フォーラムが定めた表示方法に則って自主的に表示しています。

